

茨城県近代美術館
研究紀要
15

2024年度

ISSN 1346-1877

茨城県近代美術館

研究紀要

15

茨城県近代美術館
研究紀要 **15**

発行年 二〇二五年三月

編集発行 茨城県近代美術館

水戸市千波町東久保六六六一

電話 〇二九―二四三―五一―

Fax 〇二九―二四三―九九九二

印刷所 株式会社 光和印刷

〈資料紹介〉

横山大観・菱田春草の齋藤隆三宛書簡

―前期日本美術院の五浦時代を中心に―

塩田 积雄

解題

茨城県天心記念五浦美術館では、令和四年度に企画展「再興院展の立役者 齋藤隆三展」（会期…令和四年十月八日～十一月二十七日）を開催した。齋藤隆三（一八七五～一九六二）は千葉県相馬郡（現・茨城県守谷市）出身の在野の歴史家で、近世の風俗史等に関する著作を多数上梓している。また大正三年に日本美術院の再興発起人の一人となり、以降没するまで経営者として同美術団体の運営に携わった人物としても知られ、『日本美術院史』『大痴芋銭』『横山大観』『岡倉天心』等、日本美術院と関連作家の史伝を書き残している。企画展準備に際し、当館では横山大観、菱田春草から齋藤隆三に送られた書簡複数通の調査を行った。これらの書簡は、彼らの五浦での生活や制作の動向を示す重要な資料群である。特に大観書簡には未発表資料が多数確認されたが、企画展での紹介は一部に留まった。

調査対象とした書簡資料四十二件は別表に示している。本稿では、このうち未発表資料を中心とした二十七件に資料番号を振り、翻刻と資料図版を掲載した。なお春草書簡の大部分は『菱田春草総合年譜』（下伊那教育委員会、一九七四年『菱田春草 続』（大日本絵画巧芸美術、一九七八年）で既に紹介されており、本稿に掲げた春草書簡は四件に限った。

大観書簡のうち主要な資料について、その内容に触れたい。齋藤隆三と大観・春草らの交友が本格化したのは、日本美術院の絵画部が五浦に移転されて間もない明治四十年の年始からと推定される。齋藤隆三『自叙傳』（志富勲負、一九六一年、以下『自叙傳』）によれば、明治四十年一月六日にいはらき新聞社の佐藤秋蘋（勇作）と五浦を訪れている。「資料1」は九日付の書簡だが、その冒頭に「先日は御来浦被下候處失礼仕候／御宥被下度候」とあり、その面会は決して満足のいく内容でなかったことが窺えるものの、齋藤の年始間もない「来浦」を裏付ける。話題は来たる十三日に予定される「五浦四画伯招待会」へと展開し、十五日付の「資料2」は同招待会に対する礼状となっている。

「資料4、5、7、8」には支援者の飯村丈三郎に大観が納めた「佛陀」（図1）の制作

経緯が事細かく記されている。例えば画題について、「資料4」では「四季之如きモノ」を描くことを大観側から提案しているが、「資料5」には「飯村様御高嘱之作品画題委細拝承仕候間御指示之如く近々執筆仕り度存居候」とある。すなわち飯村側から何かしらの注文があり、それを受けた大観が「小生の画題人物には釋尊が観音相画き度く存申候へ共如何に候や」と仏画の構想を始めたことが読み取れる。飯村から大観を含めた五浦の四作家への揮毫依頼については『自叙傳』にも詳述されているが、書簡資料は更にその内容を補うものである¹⁾。

「資料11」は大観の大阪滞在に関する内容である。明治四十年十一月二十五日に大阪入りした大観は、泉布観で滞在制作を行つたらしい²⁾。『美術新報』の記事には春秋会の歓迎を受けたとあり、これは明治三十九年に尾竹越堂、北野恒富らによって大阪で結成された画会のことと思われる。「資料11」は明治四十一年二月四日付で、大観の大阪滞在が前年から継続したものか詳らかでないが、一月の橋本雅邦葬儀の際には大阪から駆けつけ、また大阪にとんぼ返りしたらしく³⁾、「資料11」にある「滞坂又旅行もほと／＼いやに相成申候間近々に帰浦仕り度存居申候」との文面からも、滞在が長期間に及んだものと想像できる。この時期、三月に水戸で開催される「日本美術院小展覧会」の準備にあたっていた春草から齋藤に送られた書簡もまた、大観の不在を仄めかしている⁴⁾。同年三月二十日に、五浦に戻った大観から奈良の新納忠之介に送られた書簡が残されているが（茨城県天心記念五浦美術館蔵）⁵⁾、冒頭「少々いやに相成候為本月（中略）十一日帰浦仕候」と五浦に戻ったことを伝えている。更に新納宛書簡には「只今当地例年二なき寒氣日二陰鬱なる天候にて海暴れ何等之風趣もなく候／猶一月ほど滞坂之方面白き事なりしと歸りて后思ふ出申候」と大観の心情が綴られ、その書きぶり等から総合的に判断すると、大阪滞在期間は明治四十年末から翌年三月頃と推測する。

「資料12」では、同年秋に開催が予定される国画玉成会出品作「月の四題」の構想が語られている。大観が実際に出品したのは「月二題（煙月）（凍月）」であった。最終的に二題となった経緯について大観は、「これは「月四題」といふことになつてゐますが、夏と秋の月を描きましたかどうか、「煙月」とは春の月、「凍月」とは冬の月、間をぬかすといふこともなからうかとも思ひますが、或はその時の火事のためにえがかれなかつたのではなかつたか、今よく覚えてゐません。」と語っている⁶⁾。ここである「火事」

とは五浦自邸の失火のことで、「資料17」には、執筆中の「展覧会出品画」が火の手上がる自邸から外に持ち出される様が生々しく綴られている。いずれにせよ、「資料12」で「此頃月海に満ち居候」とあるように、五浦の景観から大観が着想を得て、実制作へと結実したことが示される点は重要であろう。

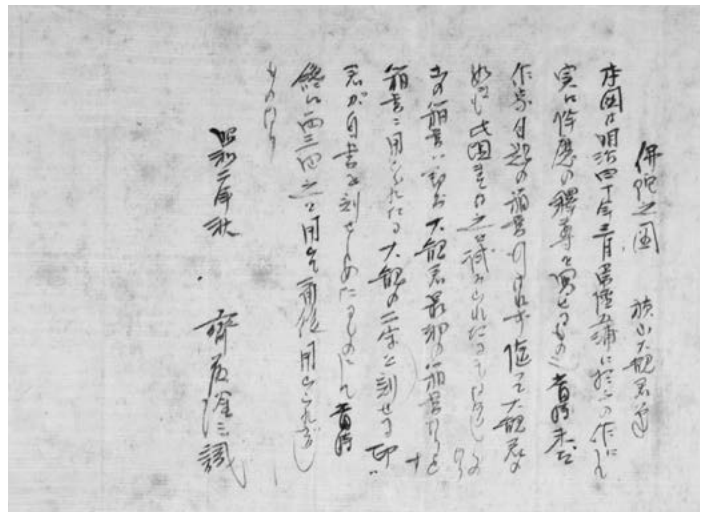
「資料15、16」は、大観の北海道小樽滞在期の前後に齋藤に宛てられたもので、「資料15」投函後の六月二十八日、現地に到着している。観山との小樽滞在は揮毫を目的としたものだったが、野本淳も指摘するように⁷、ボストンから帰国した岡倉覚三（天心）が五浦に帰還したことを受け、急遽予定を切り上げて大観らも五浦に戻るようになった。「資料16」は大観側の資料からそれを裏付けるもので、文面からは慌ただしく小樽を発ったことがうかがえる。

「資料17」は前記のとおり、五浦の大観邸失火に関する資料である。火事については画家自身の回想もあるが、より詳細に顛末が語られている。また、大観邸失火の日付は『美術新報』を根拠に十二日の午後と紹介されることが多いが、本書簡によれば十一日午後ということになり、茨城の地元紙『いはらき』が報じる九月十一日罹災が正確な情報であろう⁸。「資料27」のとおり、春草も「十一日五浦の横山君之家晝間出火致し全家焼失致し候」と齋藤に伝えており、大観の書き間違えとは考えにくい。

「資料18、19」は名古屋で発足した「大観画会」に関する資料である。同会は明治四十年から名古屋市の編纂に携わった史学者・堀田璋左右らが中心となって結成されたもので、「資料19」に申込書が附属する（図2）。大観は名古屋で滞在制作を行っていたらしく、齋藤隆三『横山大観』（中央公論美術出版、一九五八年）巻末の「年譜」にも滞在が「月を超ゆ」ものであったと記されている。書簡からは注文が殺到していたことが読み取れるが、実際に市史編纂室にいた花見朔巳などは同会を通じて作品を求めたらしい⁹。なお「資料18」には同会が「辰澤様発起」とあり、辰澤とは大観の支援者・辰澤延次郎のことと思われるが、申込書の発起人連名に名が見えない。齋藤によれば、辰澤が当時大観の何かしらの画会に関わっていたようだが¹⁰、両者の関係は不明である。「資料20、21」は第三回文部省展覧会に出品する「流燈」（茨城県近代美術館蔵）について触れられている。「資料20」は「五浦戀しく今夜急行にて一先つ帰宅仕展覧會の出品畫なり作り上げ候考ニ御坐候」と、出品作を五浦で描くことが述べられ、「資料21」は完成した「流燈」を持参して上京することを伝えている。

「資料24、27」の春草書簡についても簡潔に概要を示すと、「資料24」は「賢首菩薩」（東京国立近代美術館蔵）の文展提出に関する内容¹¹。水戸の「日本美術院小展覧会」会期中に齋藤に送られた「資料25」は制作の仲介に関する内容。「資料26」は、急病のため五浦を離れた春草が代々木に転居した後、その予後を伝えるもので、両者の親密な関係をうかがわせる。「資料27」は、国画玉成会に向けて制作を進めていることを報告しているが、結果的に出品は叶わなかった。なお『菱田春草総合年譜』『菱田春草 続』掲載内容に一部誤植があることが判明したため、別表の「備考」欄に示した。

以上のように、本書簡資料は明治四十～四十四年の大観・春草の動向を詳らかにし、今後の大観・春草研究における重要な資料と考える。それと同時に、彼らが画家として生計を立てるため方々に働きがけた支援者・齋藤の重要性が浮かび上がってくる。書簡資料からは、齋藤、あるいは齋藤の兄・斐を通じて、大観・春草への作品の注文が相当数あったことが窺える（個別の注文の詳細については引き続き調査を継続したい）。また大観の画会についても、名古屋大観画会の発起人・堀田は歴史地理学会で齋藤と交流がある人物であり¹²、学界における齋藤の人的ネットワークが、大観の画会結成に影響を及ぼした可能性がある。「資料19」本文末尾の宛名を、大観がわざわざ「齋藤学士」と記したことも、学者としての齋藤を立てる気持ちの表れであろう。同年十二月には齋藤と笹川臨風の肝煎りで「縦横会」が結成される。大観・春草ら画家と齋藤ら学識者が交わった同会設立について、齋藤は「文展創設直後で社会各方面とも美術への関心が強くなつて来た時である。新画樹立を目標に志を同じうせる画家と美術に理解ある学者と連衡して毎月一回飲み合い、話し合いをする会を作りたいということになった。」と述べている¹³。芸術家と学者の接近を目指した同会は、名古屋大観画会を踏まえて構想されたものだったかもしれない。



【佛陀添書】

佛陀之図 横山大観君筆

本図は明治四十年三月常陸五浦に於ての作にして
実に降魔の釈尊を写せるもの也 當時未だ
作家自題の箱書行はれず随つて大観君の
如きも此図までは之を試みられたることなりしものなり
この箱書ハ即ち大観君最初の箱書なりとす
箱書二用いられたる大観の二字を刻する印ハ
君が自書を刻せしめたるものにして當時
纔に兩三回之を用いて爾後用ひられざりし
ものなり

昭和二年秋 齋藤隆三識

図1 横山大観「佛陀」明治40年

拜啓各位愈々御清福之段奉敬賀候然者今般我等相謀り文
部省囑托審査員横山大観畫伯を東都より迎へ其得意の潤
筆を請ふここに致候につき幸に同好各位の御賛成を得候
はば美術界の爲め光榮不遇之候 早々敬具
明治四十二年五月 日

申込書
一大観君筆繪畫 第一種 一葉
但書題
右申込候也
明治四十二年五月 日
縣 市 町 村 寄附
中込者 香地

大観畫會發起者御中

内約
一作畫は左の五種とす
第一種 絹本 尺八 壹葉 金貳拾貳圓以上
第二種 絹本 尺五 壹葉 金拾八圓以上
第三種 絹本 尺三 壹葉 金拾五圓以上
第四種 六曲屏風 壹双 金百廿圓以上
第五種 二枚折屏風 壹双 金七拾圓以上
一畫題は山水、人物、其他任意
一申込は左の用紙又は葉書に要點御記入の上市役所内堀田瑤左右へ
御申込下されし

殿
鈴木 守 彦 七
關 木 守 彦 七
森 本 善 七
平 子 德 右衛門
水 谷 魁 庵
安 藤 清 大 郎
馬 淵 茂 助
成 田 賢 秀
加 藤 定 兵衛
春 日 井 丈 右衛門
大 澤 常 太 郎
大 喜 多 寅 之助
岡 田 良 右衛門
富 田 重 助
蜂 須 賀 光 次 郎
花 井 昌 三 郎
伊 藤 由 太 郎
井 上 茂 兵衛
長 谷 川 糾 七
堀 田 瑤 左 右
堀 田 重 助
大 喜 多 寅 之助
大 澤 常 太 郎
春 日 井 丈 右衛門
加 藤 定 兵衛
成 田 賢 秀
馬 淵 茂 助
安 藤 清 大 郎
水 谷 魁 庵
平 子 德 右衛門
森 本 善 七
關 木 守 彦 七
鈴木 守 彦 七

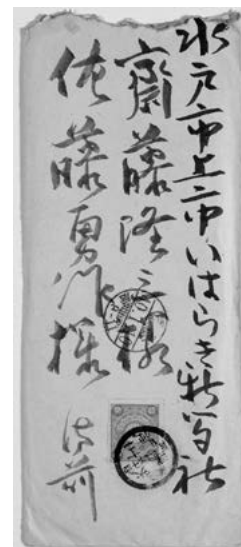
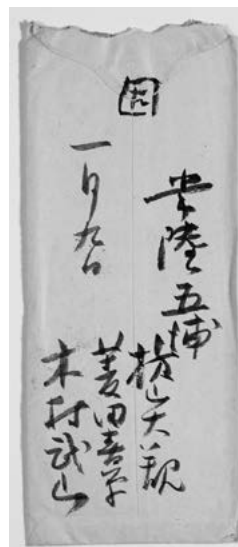
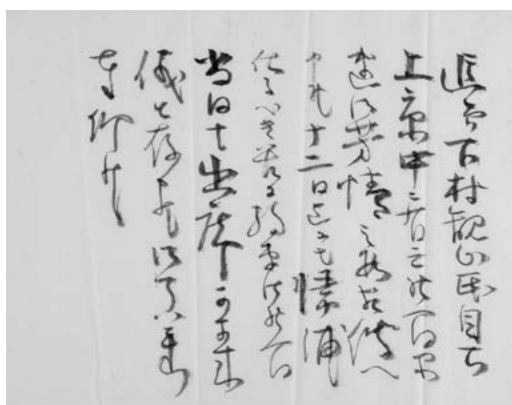
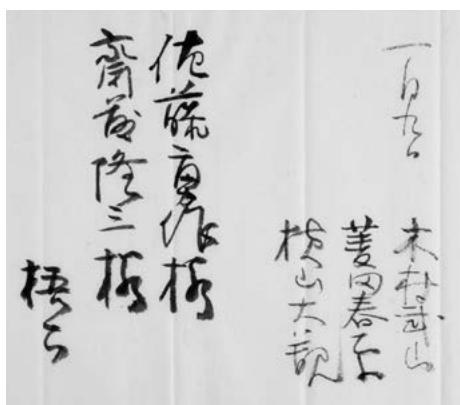
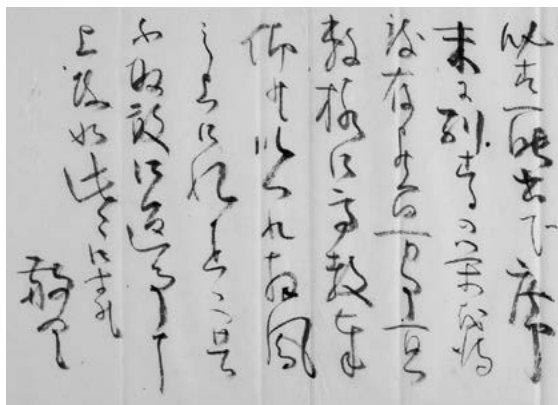
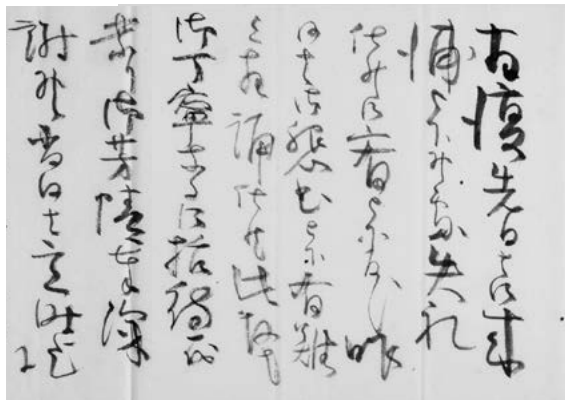
図2 大観画会申込書

注

- 1 これらの書簡資料を踏まえた「佛陀」の制作経緯については小泉晋弥「齋藤隆三と飯村丈三郎と五浦日本美術院―明治の夢の織物」(『再興院展の立役者 齋藤隆三』展図録、茨城県天心記念五浦美術館、二〇二二年)に詳しい。
- 2 『美術新報』六十九、一九〇七年。
- 3 『自叙傳』九七頁。
- 4 菱田春草「書簡・齋藤隆三宛」明治四十一年一月三十日付、二月十六日付、二月二十九日付(いずれも茨城県天心記念五浦美術館蔵)。特に二月二十九日付書簡は、大観の出品作が大阪から送付予定であると伝えている。
- 5 『茨城県天心記念五浦美術館所蔵 新納忠之介所蔵目録』第一卷(茨城県天心記念五浦美術館、二〇一八年)に翻刻が掲載される。なお『美術新報』によれば、日本の古美術研究のため来日したラングドン・ウォーナーの指導を新納に託するため、大観は大阪入りの前に奈良の新納を訪ねている。三月二十日付新納宛書簡では、「ワルナア様ともかけ違ひ御目にかゝるおりヲ失」ったまま五浦に戻ってきたと綴られている。
- 6 横山大観『大観畫談』講談社、一九五一年。
- 7 野本淳「大観・観山の小樽揮毫旅行―明治四十一年―」『横山大観記念館 館報』第十二号、一九九四年。
- 8 『いはらき』朝刊、明治四十一年九月十三日付。
- 9 「花見朔巳・相田二郎両氏追悼特輯」『歴史地理』八八―四、一九五八年。なお、同記事掲載の森克己の談によれば、森の主導による史学二高校の結成背景に花見と齋藤の支援があったという。昭和七年、齋藤の博士号取得を祝い同会が祝宴を聞き、花見も席に駆け付けたようだ(『自叙傳』一四九―一五〇頁)。
- 10 『自叙傳』一〇〇頁。
- 11 拙稿「齋藤隆三と茨城の美術史形成について」『茨城県近現代史研究』七、二〇二三年。
- 12 『自叙傳』五二頁。
- 13 『自叙傳』三二〇―三二二頁。

凡例

- ・別表のうち、資料番号を振った資料の図版と翻刻を掲載した。
- ・原則的に書簡本文の改行に則して翻刻も改行を行った。
- ・資料中の実際の表記に関わらず、便宜上「齋藤隆三」に表記を統一した。
- ・変体仮名は現行表記に改めた。
- ・判読不能な文字は□とした。
- ・翻刻は小泉晋弥(茨城県天心記念五浦美術館長)と共同で行った。



【封筒表】

水戸市上市いはらき新聞社

【本文】

拝復 先日は御来

一月九日 木村武山

齋藤隆三様

菱田春草

佐藤勇作様 御前

横山大観

【封筒裏】

常陸五浦

横山大観

菱田春草

木村武山

一月九日

浦被下候處失礼
仕候 御宥被下度候 昨
日は御懇書被下有難
く拝誦仕候 此度は
御丁寧なる御招待(*)を
蒙り御芳情奉深
謝候 當日は定時迄に
必ず罷出で席
末に列するの栄を得
度存申候間万事宜
敷様御高教奉
仰候 いづれ拝鳳
之上御礼申上候へ共
不取敢御返事申
上度如此二御坐候
敬具

一月九日 木村武山
菱田春草
横山大観
佐藤勇作様
齋藤隆三様
梧下

追啓 下村観山氏目下
上京中二有之候間早
速御芳情之段相傳へ
申候 十二日迄には帰浦
仕るべき筈に約束仕候間
當日は出席可相成
儀と存申候 御了承
奉仰候

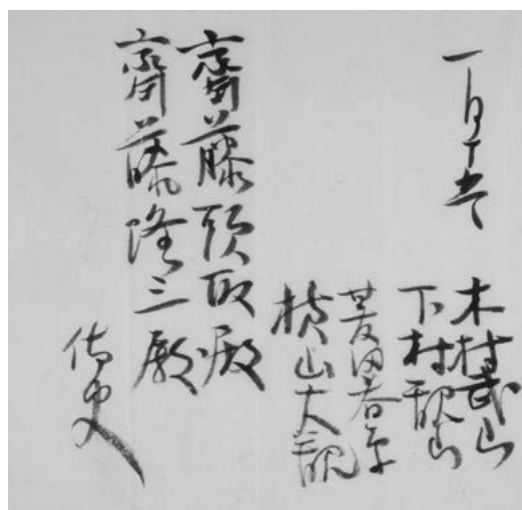
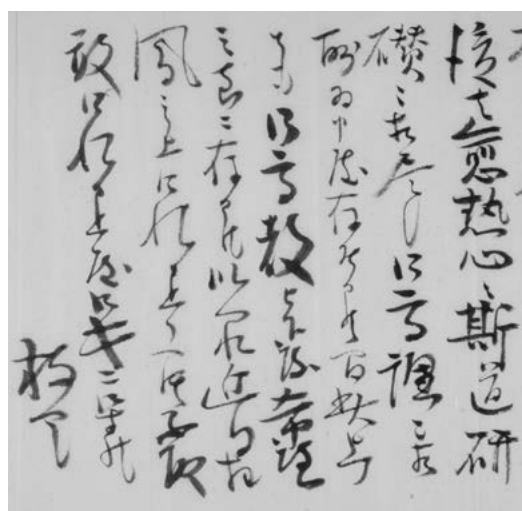
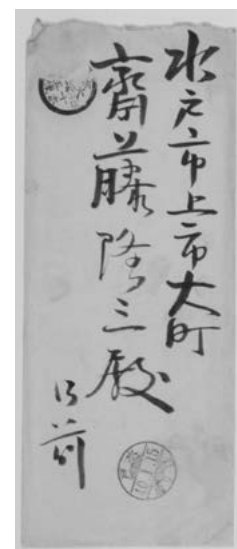
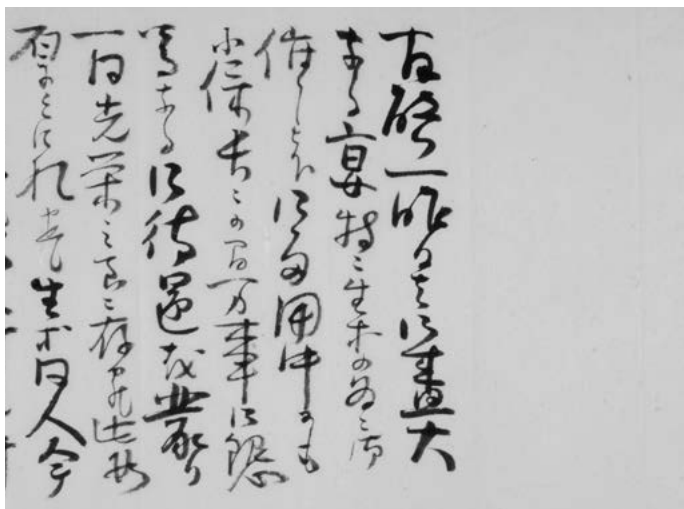
資料1

横山大観、菱田春草、木村武山

「書簡・齋藤隆三、佐藤勇作宛」

明治40年1月9日

(*) 1月13日に予定される「五浦四画伯招待会」(水戸・垂楊亭)。



【封筒表】 水戸市上市大町
齋藤隆三殿
御前

【封筒裏】 茨城縣多賀郡大津町五浦
日本美術院

【本文】 拝啓 一昨日は御盛大なる宴特ニ生等の為ニ御催し被下御多用中にも不係すこの間万事御懇篤なる御待遇を蒙り
一同光榮之至ニ存申候 此段厚く御礼申上候 生等同人今後は愈熱心ニ斯道研鑽ニ相尽候 御高誼ニ相酬の申度存居候間此上とも御高教被下度希望之至ニ存申候 いつれ近日拝鳳之上御礼申上候へ共不取敢御礼申上度如此ニ御坐候
敬具

一月十五日 木村武山
下村觀山
菱田春草
横山大觀

齋藤頭取殿(*)
齋藤隆三殿
侍史

資料2
日本美術院
「書簡・齋藤隆三宛」
明治40年1月15日

(*) 茨城農工銀行の頭取を務めた長兄・齋藤斐。

上殿はすかたより
 馬もふたふたは存
 我れも有難とされ
 けしともこの了教
 上殿も所賜おはれ
 る犯されは行若
 みり若きすお揃
 中止しすも目
 父の病報に病

常陸大津町五浦
 横山大観

京市小石川区水道端
 〆三五 飯村殿邸内
 齋藤隆三様

犯ししおはれけし
 〆面今も様うき
 何れも感のるね
 〆果ねも依谷大所
 〆は座よりれ存元
 〆候にち多岡崎雪
 〆所を銅像れ一切
 〆業務は事候方
 〆話の要ふ小生
 〆おはれなせし
 〆近向改え上
 〆改められ上
 〆返すこと
 〆貴下
 〆齋藤隆三様

【封筒表】

〇京市小石川区水道端
 〆三五 飯村殿邸内
 齋藤隆三様

【封筒裏】

常陸大津町五浦
 横山大観

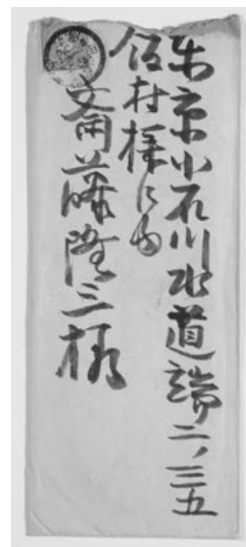
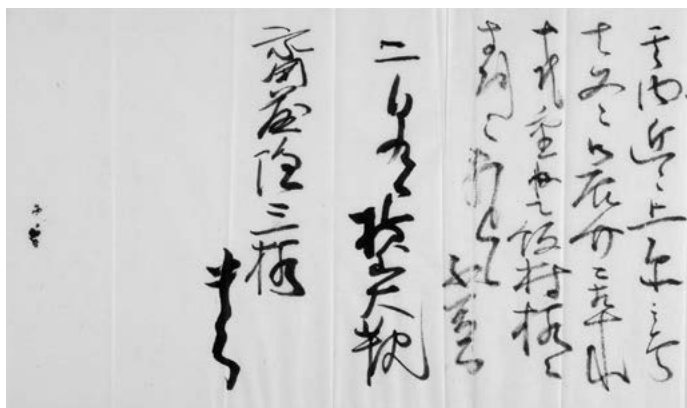
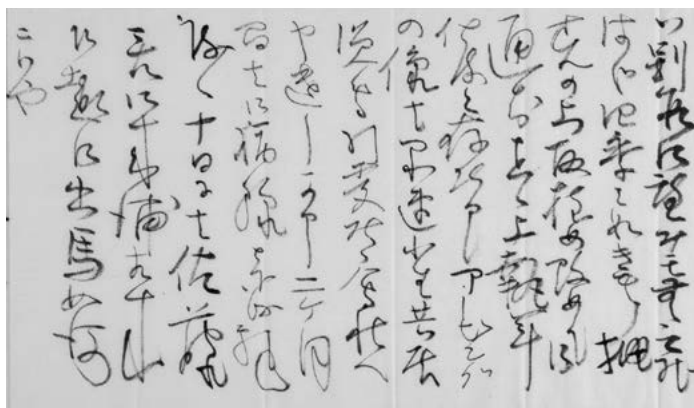
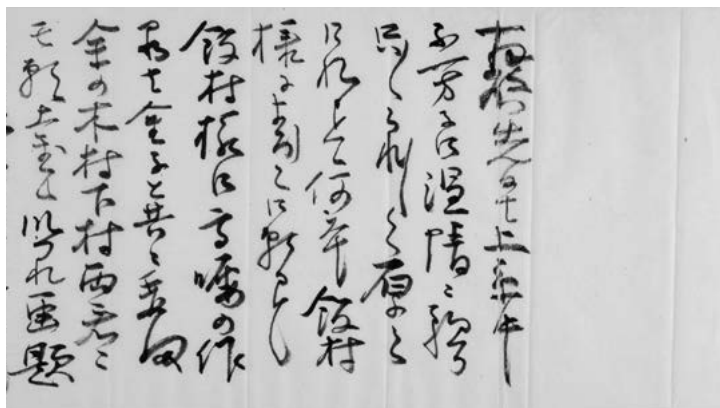
【本文】

拝啓 御無沙汰申上候
 過日は不一方な御厚誼
 を蒙り有難く御礼申上候
 此上ともの御高教願上候
 上京之御約束仕居候内病
 に犯され同行者に亦病
 み候者出成打揃ゐての上
 京中止二相成自分一人
 父之病報二接し病を
 犯して出京仕候へとも遂二
 御面會之機ヲ失し帰浦
 仕候 遺憾の至ニ存申候
 御尋ね之儀谷中に美術院
 ハ御座なく候へ共元同院
 の傍二正員岡崎雪声
 氏罷在銅像類一切の
 業務二従事仕居候間御
 話の委細小生より承り候上
 相傳へ問合せ申上候間御遠
 慮なく御仰せ被下度願上候
 近日改めて上京之節
 改めて御礼申上度先ハ御
 返事迄如此ニ御坐候 不宣

廿七日 横山大観

齋藤隆三様
 貴下

資料3
 横山大観
 「書簡・齋藤隆三宛」
 明治40年1月27日



【封筒表】

東京小石川水道端二ノ三五

飯村様御内

齋藤隆三様

【封筒裏】

常陸大津町五浦

横山大観

【本文】

拝啓 先日は上京中
 不一方に御温情に預り
 只くうれしく厚く
 御礼申上候 何卒飯村
 様によりしく御願申上候
 飯村様御高囀の作
 品は金子と共に委細
 余の木村下村両君ニ
 毛願上置候 いづれ画題

ハ別段御望みモ無之候
 はゞ四季之如きモノ批
 点の上取極め改めて御
 通知申上候上執筆
 仕度く存居候 アービング
 の像は早速小生共展
 覧會引受居候會社へ
 申遣し可申二ヶ月
 間は御猶餘被下度願上
 度候 十日には佐藤
 君御来浦相成
 御趣御出馬如何
 に候や
 其内近々上京之節
 は又々御厄介ニ相成
 申候 重ねて飯村様ニ
 よろしく願上候

不宣

二月九日 横山大観

齋藤隆三様

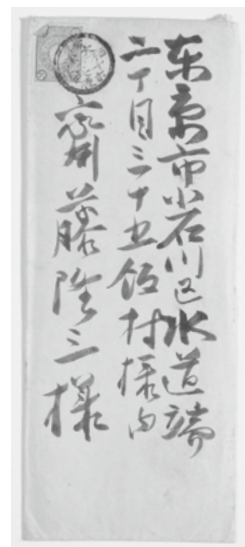
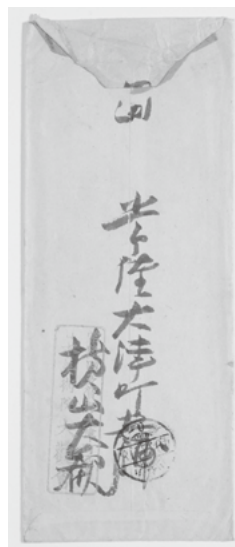
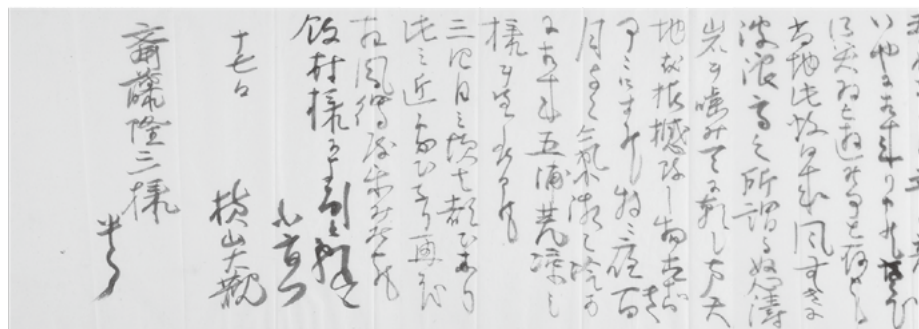
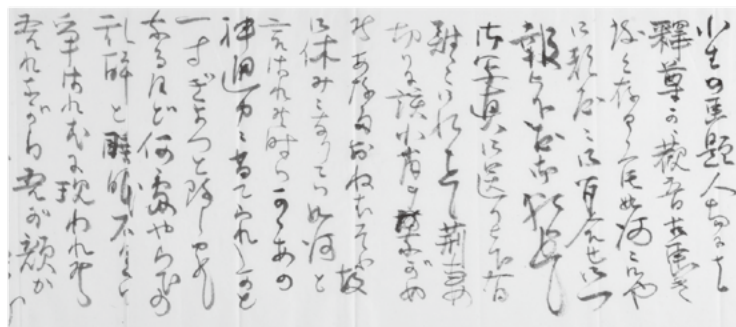
貴下

資料4

横山大観

「書簡・齋藤隆三宛」

明治40年2月9日

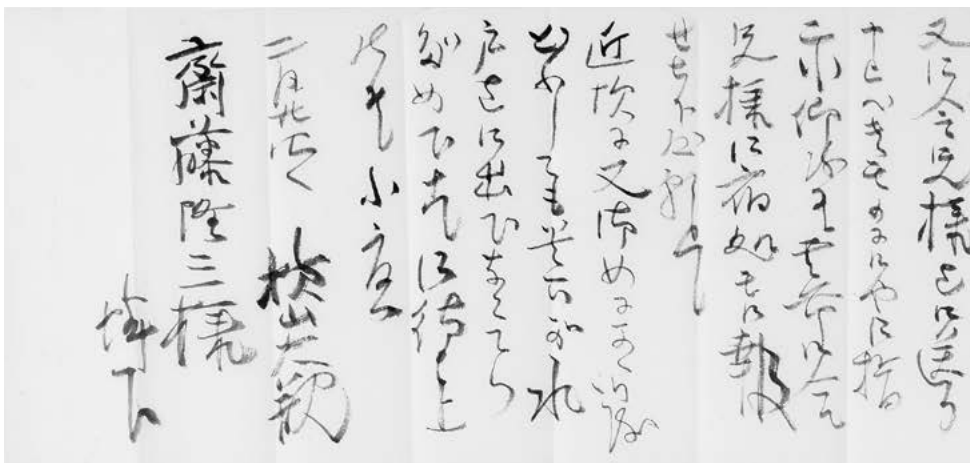
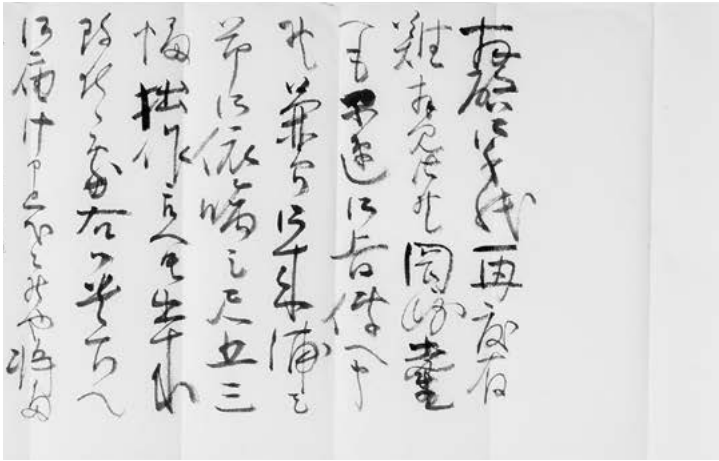
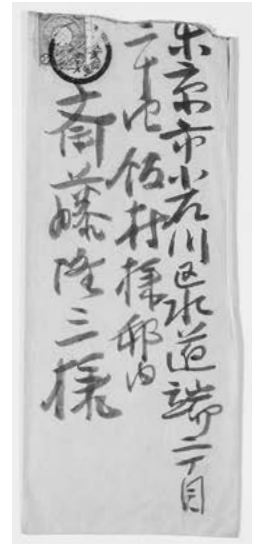


五浦 日本美術院 大觀會

御願申上候

齋藤隆三様

(46)



【封筒表】

東京市小石川区水道端二丁目

□十四 飯村様邸内
齋藤隆三様

【封筒裏】

常陸大津町五浦

横山大観

【本文】

拝啓 御手紙再度有

難拝見仕候 岡崎老生

へも早速御旨傳へ申

候 兼而御来浦之

節御依囑之尺五三

幅拙作二候へ共出来

致居候處右ハ貴下へ

御届け申上べく候や将た

又御令兄様迄御送り

申上べきものに候や御指

示仰度候 其節御令

兄様御宿処モ御報

せ被下度願上候

近頃にか又御めにかゝり度

どふしても貴下が水

戸迄御出なくてハ

だめです 御訪申上

居候 不宣

二月廿四日 横山大観

齋藤隆三様

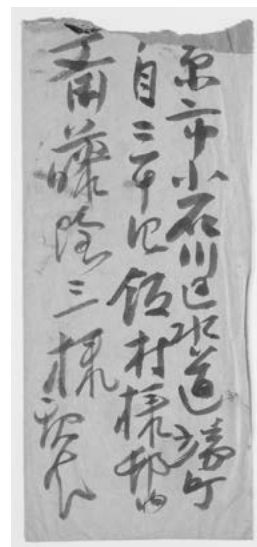
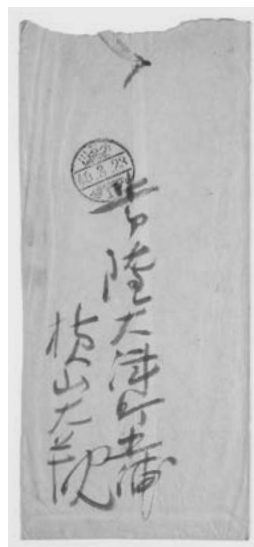
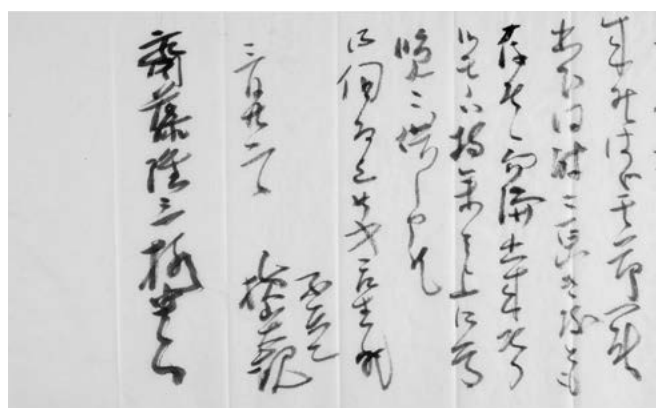
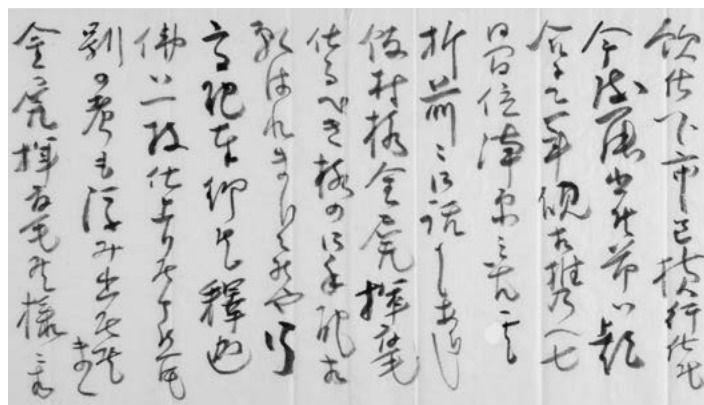
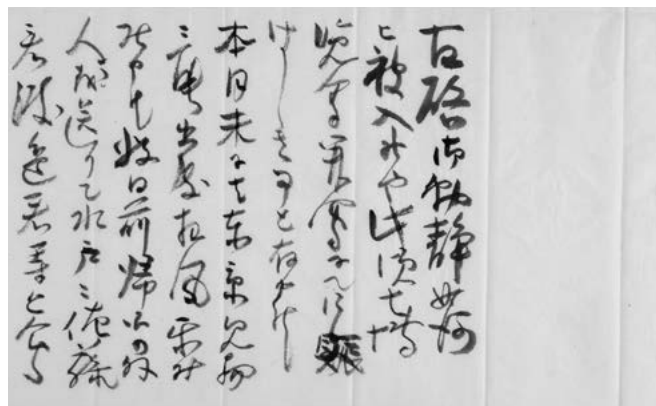
梧下

資料6

横山大観

「書簡・齋藤隆三宛」

明治40年2月24日



【封筒表】

□京市小石川区水道端町
□目三十四 飯村様邸内
齋藤隆三様 親展

【封筒裏】

常陸大津町五浦
横山大観

【本文】

拝啓 御動静如何
被被入候や 此頃は博
覧會（*）開會にて御賑
はしき事と存申候
本月末には東京見物
に罷出度拝鳳楽み
居申候 数日前帰国の外
人を送りて水戸二佐藤
君渡邊君等と會

飲仕下市迄横行仕候
今度罷出候節八都

合にて筆硯相携へ七
日間位滞京之筈二候

折前二御話しありし
飯村様金屏揮毫

仕るべき様の御手配相
願はれまして候や御

高配奉仰候 釋迦

佛ハ一枚仕上り居申候へ共
別の考も浮み出居候まゝ

金屏揮毫候様二相
成候はゞ其節罷

出下同時二画き度とも
存居候 勿論出来居り

候モノハ持参之上御高
覧二供し申候

不宣

三月廿二日 横山大観

齋藤隆三様 貴下

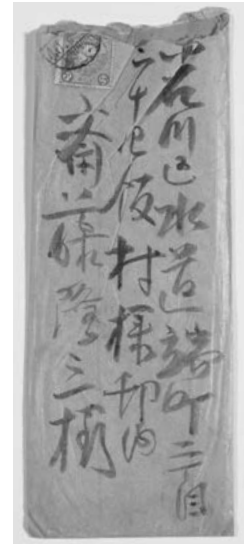
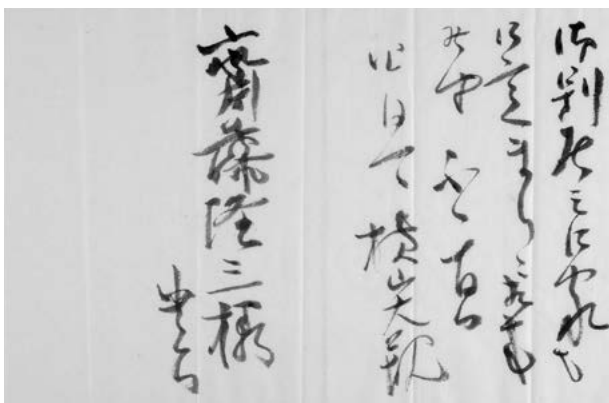
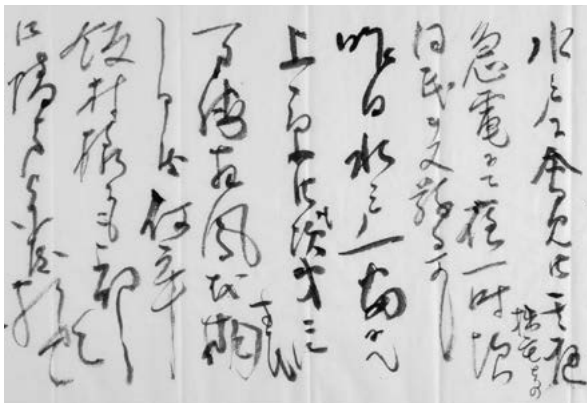
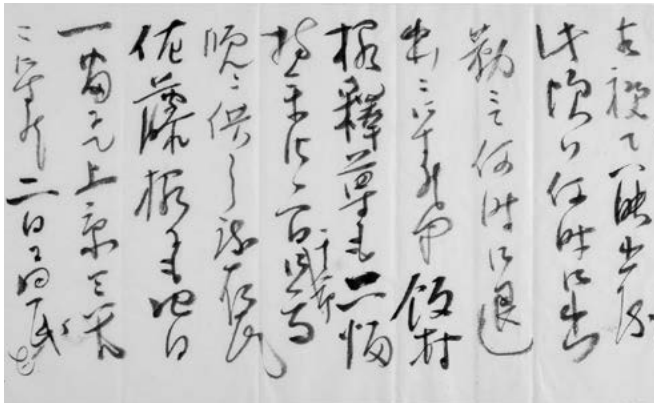
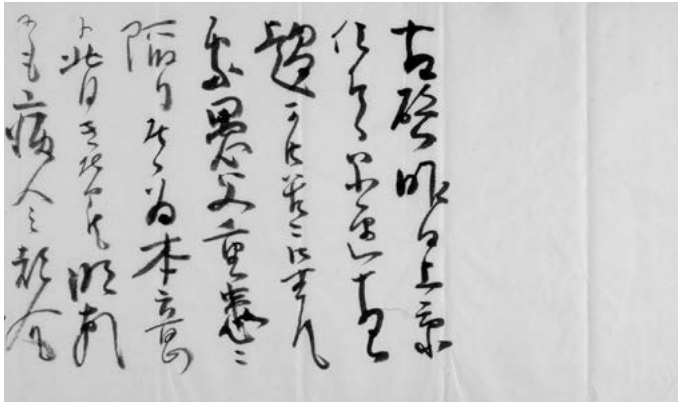
資料7

横山大観

「書簡・齋藤隆三宛」

明治40年3月22日

（*）東京勸業博覧会



【封筒表】

小石川区水道端町二丁目
三十四 飯村様邸内
齋藤隆三様

【封筒裏】

下谷区谷中初音町四丁目
一三四 酒井方
横山大観

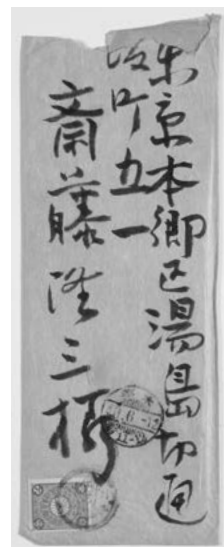
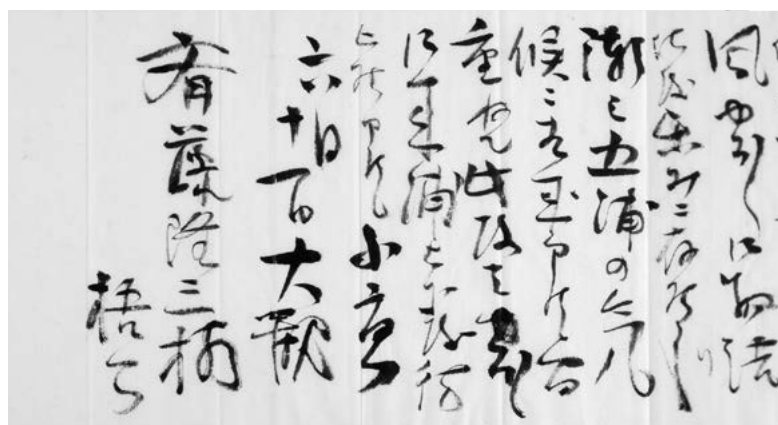
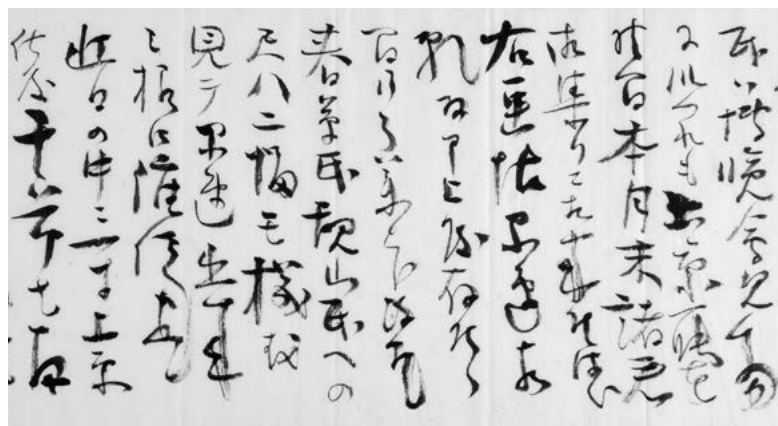
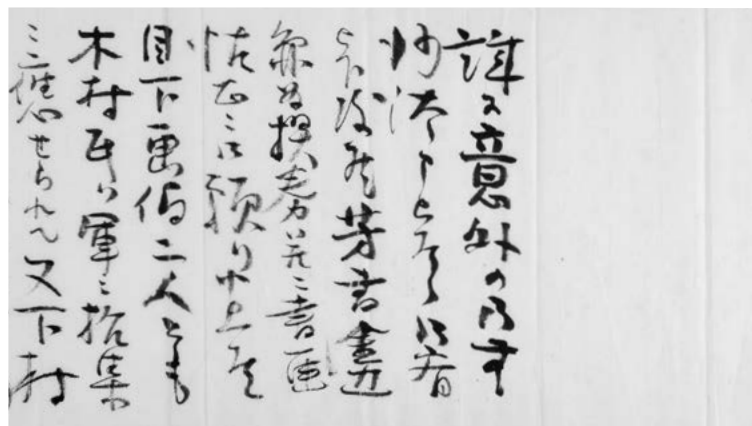
【本文】

拝啓 昨日上京
仕居候 早速拝
趨可仕苦二御坐候
處愚父重患二
陥り居候為本意
に背き居申候 明朝
にも病人之都合
相攬て罷出度
此頃ハ何時御出
勤ニて何時御退
出ニ御坐候や 飯村
様釋尊も二幅
持参仕候間其節御高
覧ニ供し度存候
佐藤様にも四日
一番にて上京之旨
二御坐候 二日に同氏と
齊藤隆三様
貴下
水戸に會見仕其夜
拙宅よりの
急電にて夜一時頃
同氏ヲ又驚可候
昨日水戸一番にて
上京仕候次第二御坐候
万樓拜鳳を期
し申度何卒
飯村様にもよろしく
御傳声被下度願上候
御別居之御家は
御定まりに相成
候や(*) 不宣
四月一日 横山大観

資料 8
横山大観
「書簡・齋藤隆三宛書簡」

明治40年4月1日

(*) 齋藤は3月29日に湯島切通坂町51番地に移住し、仮寓していた飯村丈三郎邸を離れる。



【封筒表】

東京本郷区湯島切通

坂町五一

齋藤隆三様

【本文】

誠に意外の御無

沙汰申上居候 御宥

被下度候 芳書金五

圓為換券并二書画

帖正二御預り申上候

目下画伯二人とも

木村氏ハ軍之拾集

二應せられて又下村

氏ハ博覽會見物

にいつれも上京罷在

候間本月末諸君

相集り二相成候はゞ

右画帖早速相

願の申上度存居候

間御了承被下度候

春草氏觀山氏への

尺八二幅毛機を

見テ早速出成

之様御催促申上候

近日の中二一寸上京

仕度其節は拝

鳳ゆるく御物語り

仕度楽みニ存居候

漸く五浦の気

候二相成申候間

重ねて此度はゆるく

御来浦被下度待

被居申候 不宣

六月十一日 大観

齋藤隆三様

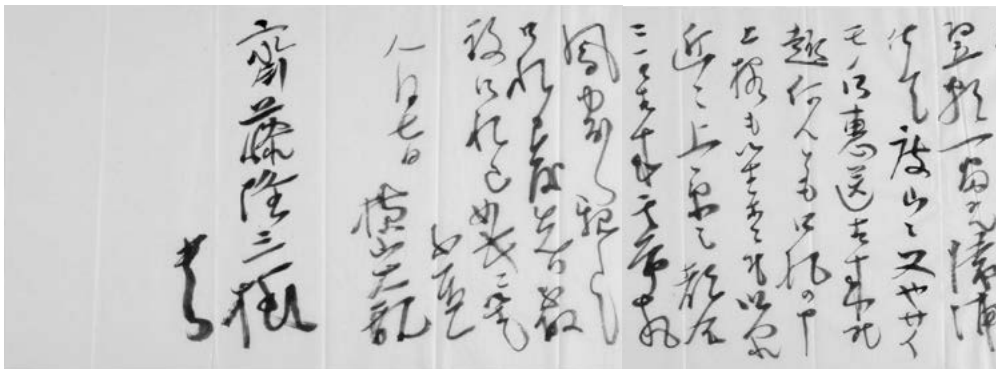
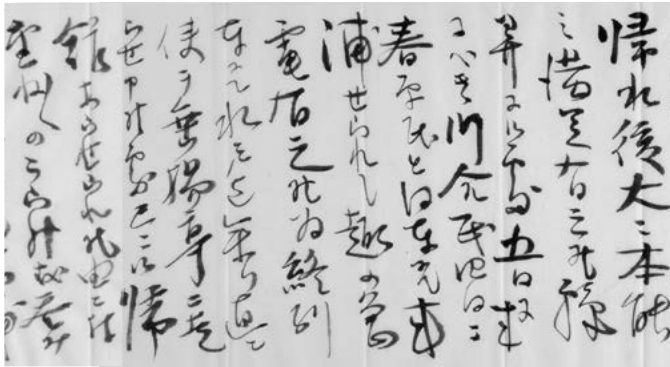
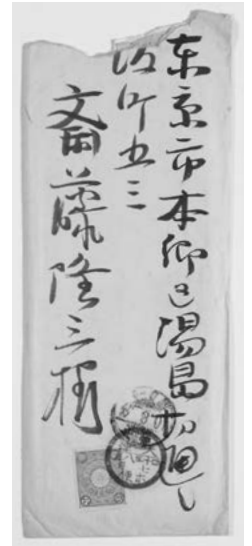
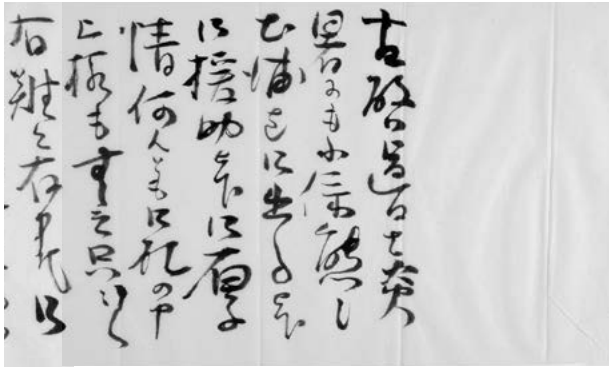
梧下

資料9

横山大観

「書簡・齋藤隆三宛」

明治40年6月11日



【封筒表】

東京市本郷区湯島切通し

坂町五三

齋藤隆三様

【封筒裏】

常陸五浦

横山大観

【本文】

拝啓 過日は炎

暑にも不係態々

五浦迄御出馬被下

御援助被下御厚

情何んとも御礼の申

上様も無之只だく

有難く存申候 御

帰水後大ニ本能

之満足有之候豫

定に候處五日に來

るべき川合氏四日ニ

春草氏と同車にて來

浦せられし趣の急

電有之候為終列

車にて水戸迄乗り直ニ

使ヲ垂楊亭ニ走

らせ申候處已ニ御帰

館あらせられ候由ニ付

重ねくのうらみを呑み

翌朝一番にて帰浦

仕候 度山ニ又ヤサイ

モノ御恵送相成候

趣何んとも御礼の申

上様も御坐なく候 いつれ

近々上京之都合

ニ可相成其節拜

鳳ゆるく親しんで

御礼申上度先ハ不取

敢御礼迄如此ニ御坐候

不宣

八月七日 横山大観

齋藤隆三様

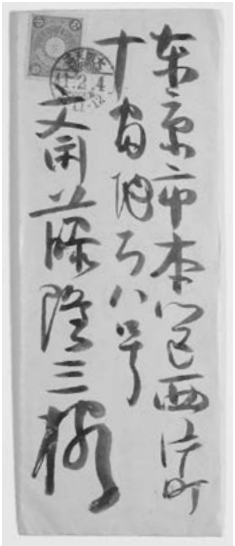
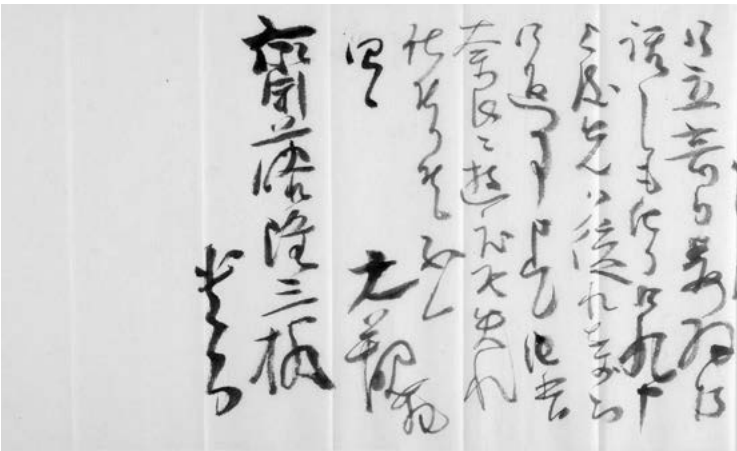
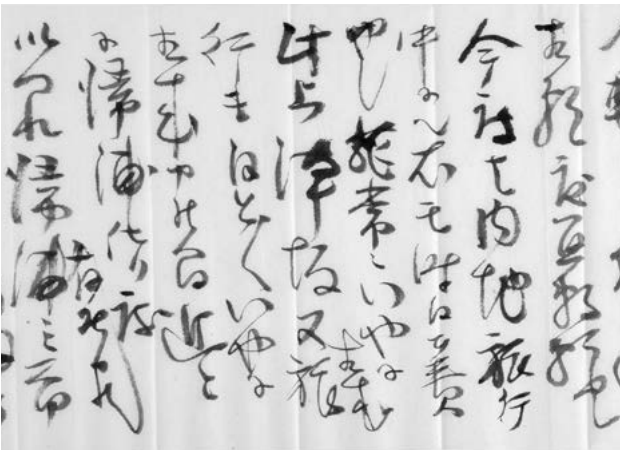
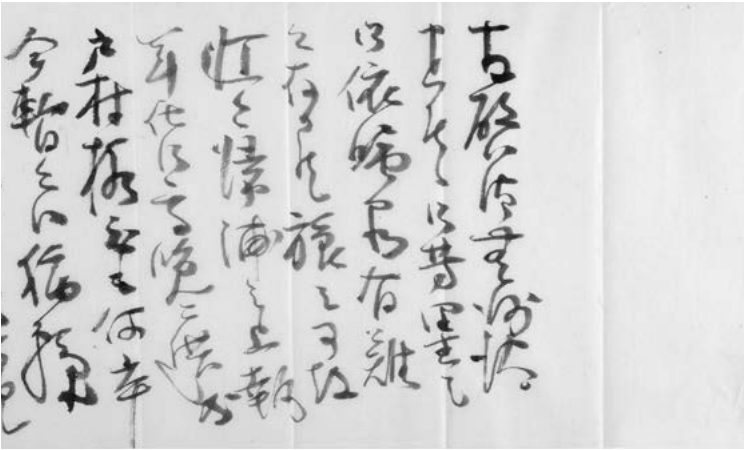
貴下

資料10

横山大観

「書簡・齋藤隆三宛」

明治40年8月7日



【封筒裏】

東京市本郷区西片町

十番地ろ八号

齋藤隆三様

【封筒裏】

大坂北区泉布観

横山大観

【本文】

拝啓 御無沙汰

申上居候 御芳墨之

御依囑品有難

く存申候 旅之事故

近々帰浦之上執

筆仕御高覧二供し度

戸村様分も何卒

今暫く御猶餘

相願度宜敷願申候

今度は内地旅行

中にて右モ時日ヲ費

やし非常ニいやに相成

此上滞坂又旅

行もほとくいやに

相成申候間近々

に帰浦仕り度存居申候

いつれ帰浦之節

御立寄り委細御

話しも仕り御礼申

上度先ハ遅れながら

御返事申上候 四五日

奈良ニ遊び居失礼

仕居り候 不一

四日 大観拝

齋藤隆三様

貴下

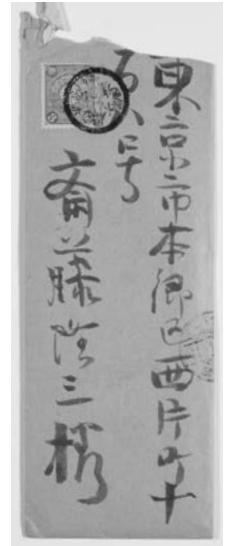
資料11

横山大観

「書簡・齋藤隆三宛」

明治41年2月4日

いふ村の絵
いつも愚作
に御高需二相
叶る候や如何と
恐懼罷在候
二尺巾の方の
月夜帰帆の
圖ハ其後貴兄
より御内話之分
之積にて認め申候
よろしく願上候
間
いたし申候間
いづれ其頃拝
顔之榮を得
度樂み居り候
御笑
様ニて候
慧なさ過ぎ候
かけ余り智
の圖ヲ御めに
いつれも月夜
罷在候まゝ
出品せんと工夫
其に此秋には月
の四題など
に満ち居候為
恰も此頃月海
に満ち居る為
之は秋と七月
の二題とぞ
あやせんや
此れを
以て余り智
つて國すはめ
慧なさ過ぎ候
折るは
おもしろ
一二日前より
とちや
あやせんや



いふ村の絵
いつも愚作
に御高需二相
叶る候や如何と
恐懼罷在候
二尺巾の方の
月夜帰帆の
圖ハ其後貴兄
より御内話之分
之積にて認め申候
よろしく願上候
間
いたし申候間
いづれ其頃拝
顔之榮を得
度樂み居り候
御笑
様ニて候
慧なさ過ぎ候
かけ余り智
の圖ヲ御めに
いつれも月夜
罷在候まゝ
出品せんと工夫
其に此秋には月
の四題など
に満ち居候為
恰も此頃月海
に満ち居る為
之は秋と七月
の二題とぞ
あやせんや
此れを
以て余り智
つて國すはめ
慧なさ過ぎ候
折るは
おもしろ
一二日前より
とちや
あやせんや

いふ村の絵
いつも愚作
に御高需二相
叶る候や如何と
恐懼罷在候
二尺巾の方の
月夜帰帆の
圖ハ其後貴兄
より御内話之分
之積にて認め申候
よろしく願上候
間
いたし申候間
いづれ其頃拝
顔之榮を得
度樂み居り候
御笑
様ニて候
慧なさ過ぎ候
かけ余り智
の圖ヲ御めに
いつれも月夜
罷在候まゝ
出品せんと工夫
其に此秋には月
の四題など
に満ち居候為
恰も此頃月海
に満ち居る為
之は秋と七月
の二題とぞ
あやせんや
此れを
以て余り智
つて國すはめ
慧なさ過ぎ候
折るは
おもしろ
一二日前より
とちや
あやせんや

いふ村の絵
いつも愚作
に御高需二相
叶る候や如何と
恐懼罷在候
二尺巾の方の
月夜帰帆の
圖ハ其後貴兄
より御内話之分
之積にて認め申候
よろしく願上候
間
いたし申候間
いづれ其頃拝
顔之榮を得
度樂み居り候
御笑
様ニて候
慧なさ過ぎ候
かけ余り智
の圖ヲ御めに
いつれも月夜
罷在候まゝ
出品せんと工夫
其に此秋には月
の四題など
に満ち居候為
恰も此頃月海
に満ち居る為
之は秋と七月
の二題とぞ
あやせんや
此れを
以て余り智
つて國すはめ
慧なさ過ぎ候
折るは
おもしろ
一二日前より
とちや
あやせんや

【封筒表】 東京市本郷区西片町十
ろ八号
齋藤隆三様
【封筒裏】 横山大観
常陸大津町五浦

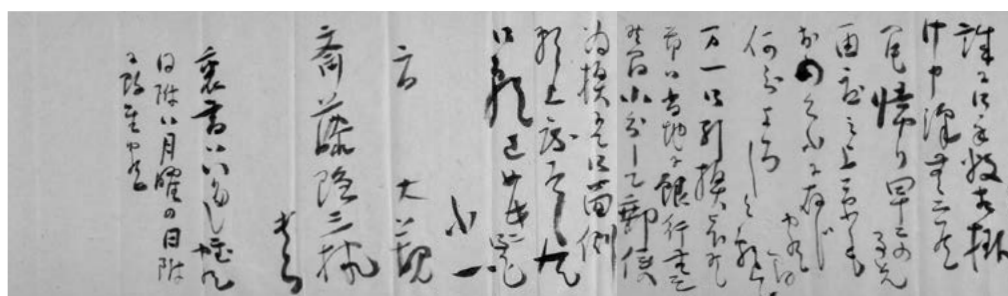
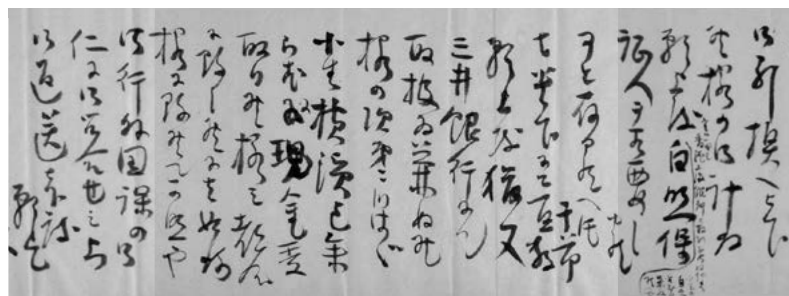
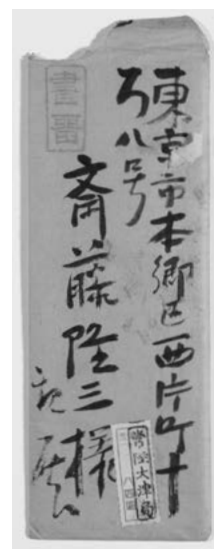
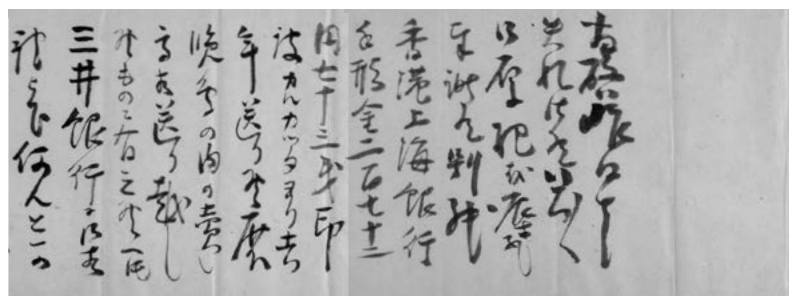
【本文】

小包料上京之
際御返し申上候間
よろしく願上候
拝啓 此度は又
東京府よりいや
な囑托ヲ受け(*)
十四五日ニ上京之
筈之處おふ着
フきめ二十七八日
頃ニ上京之事ニ
いたし申候間
いづれ其頃拝
顔之榮を得
度樂み居り候

戸村様の絵
いつも愚作
にて御高需二相
叶る候や如何と
恐懼罷在候
二尺巾の方の
月夜帰帆の
圖ハ其後貴兄
より御内話之分
之積にて認め申候
よろしく願上候
間
いたし申候間
いづれ其頃拝
顔之榮を得
度樂み居り候
御笑
様ニて候
慧なさ過ぎ候
かけ余り智
の圖ヲ御めに
いつれも月夜
罷在候まゝ
出品せんと工夫
其に此秋には月
の四題など
に満ち居候為
恰も此頃月海
に満ち居る為
之は秋と七月
の二題とぞ
あやせんや
此れを
以て余り智
つて國すはめ
慧なさ過ぎ候
折るは
おもしろ
一二日前より
とちや
あやせんや

資料12
横山大観
「書簡・齋藤隆三宛」
明治41年4月17日

(*) 第8回異画会審査員のことが。



【封筒表】

東京市本郷区西片町十
ろ八号

齋藤隆三様

親展

横山大観

常陸大津町五浦

【本文】

拝啓 昨日は

失礼仕候 いろく

御厚配を辱ふし

奉謝候 別紙

香港上海銀行

手形金二百七十二
円七十三匁印

度カルカッタヨリ去
年送り候展

覽會の内の賣レ

高相送り越し

候もの二有之候へ共

三井銀行に御相

談被下何とか

御引換へ被下

候様の御計為

願上度

小生ハ一回モ

上海銀行と取引不仕同行にて

小生の

身元

相分り

兼ね

候へば

自然保

証人ヲ相要し申候

事と存申候へ共其節

は貴下にて宜敷

願上度猶又

三井銀行にて

取扱の兼ね候

様の次第二候はゞ

小生横濱迄参

らずに現金受

取り候様之都合

に致し候には如何

様に致候てか然や

御行外国課の御

仁に御問合せ之上

御返送被下度

願上候

誠に御手数相掛

け申譯無之候

へ共帰り早々の事とて

再度之上京も

おつくふに存じ申候間

何分よろしく願上候

万一御引換被下候

節ハ當地に銀行無之

候間小分して郵便

為換にて御面倒

願上度居候 右

御願迄如此ニ御坐候

不一

二日 大観

齋藤隆三様

貴下

裏書ハいたし置申候

日附八月曜の日附

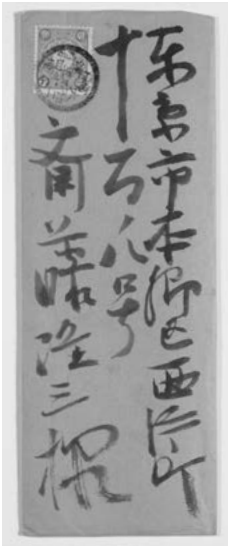
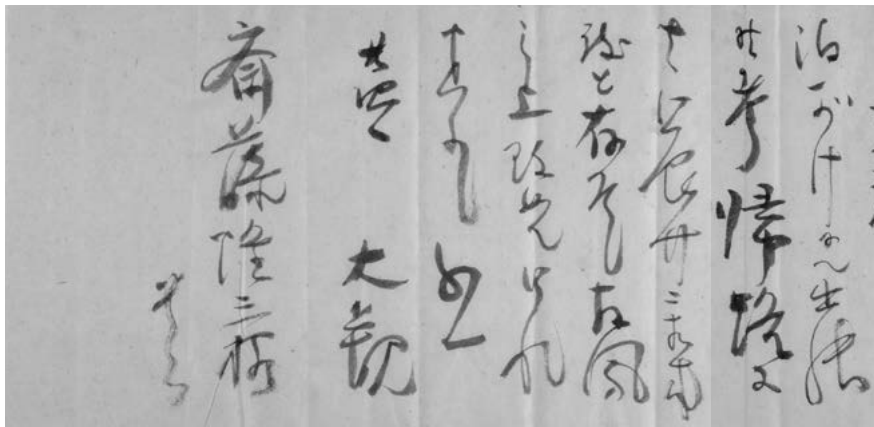
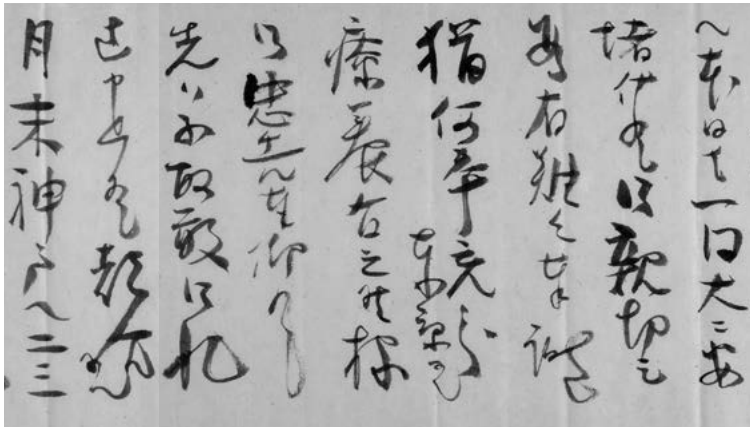
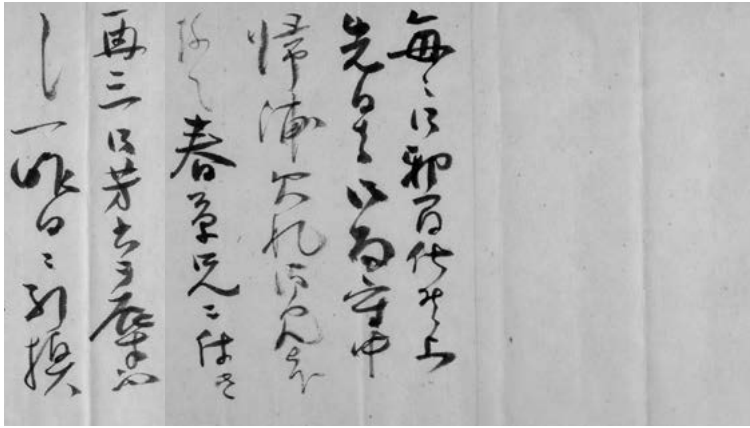
に致置申候

資料13

横山大観

「書簡・齋藤隆三宛」

明治41年5月2日



【封筒表】 東京市本郷区西片町

十ろノ八号
齋藤隆三様

【封筒裏】 横山大観

常陸大津町五浦

【本文】

毎々御邪間仕候上

先日は御留守中

帰浦欠礼御免被下

度候 春草兄二付き

再三御芳書ヲ辱ふ

し一昨日二引換

へ本日は一同大二安

堵仕候 御親切之

段有難く奉謝候

猶何卒充分東京にて

療養有之候様

御忠告奉仰候

先ハ不取敢御礼

迄申上仕候 都合にて

月末神戸へ二三

泊がけにて出張

候考帰路に

は御厄介二相成

度と存居候 拝鳳

之上改めて御礼

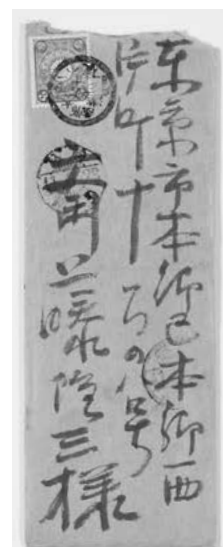
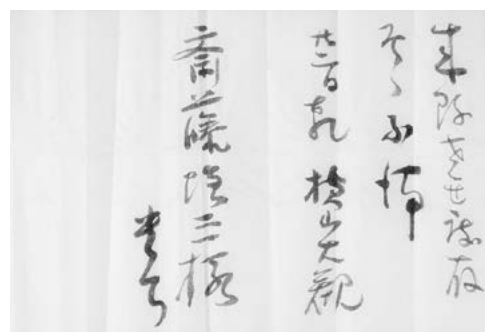
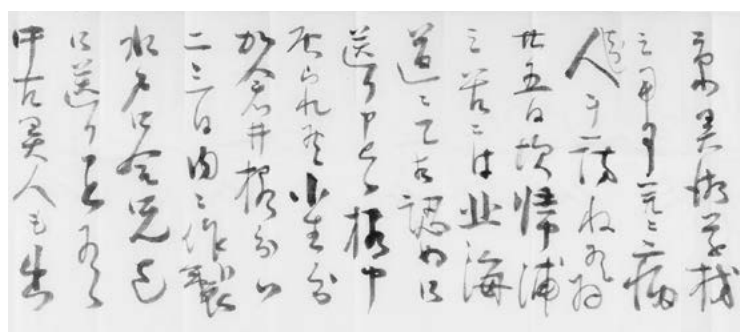
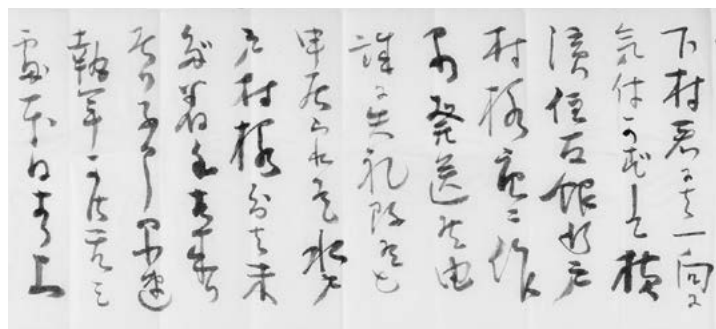
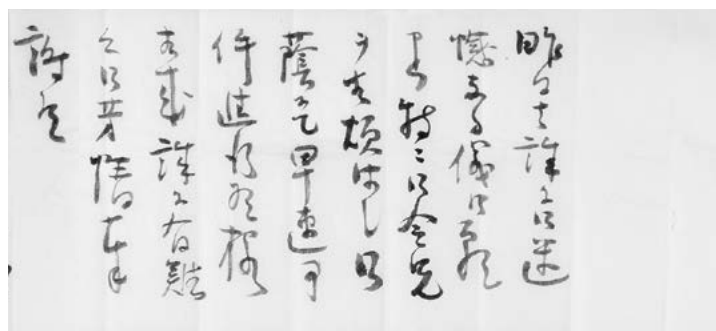
申上候 不一

二十四日 大観

齋藤隆三様

貴下

資料14
横山大観
「書簡・齋藤隆三宛」
明治41年5月24日



【封筒裏】 東京市本郷区本郷西

片町十の八号

齋藤隆三様

【封筒表】 横山大観

常陸大津町五浦

【本文】

昨日は誠に御迷

憾なる儀御願

申上候 特ニ御令兄

ヲ相煩はし御

薩にて早速事

件進行候様

相成誠に有難く

御芳情奉

謝候

下村君には一向に

気付かずして横

濱住友銀行戸

村様宛ニ作

品発送候由

誠に失礼致候と

申居られ候水戸

戸村様分は未

だ着手相成り

居り不申候 早速

執筆可仕答之

處本日より上

京美術学校

之用事并二病

知人ヲ訪ね候為

廿五日頃帰浦

之ニ付北海

道にて相認め御

送申上候様申

居られ候小生分

加倉井様分ハ

二三日内ニ作製

水戸御令兄迄

御送り申上候

中古美人も出

来致させ度存

居候 不備

廿二日朝 横山大観

齋藤隆三様

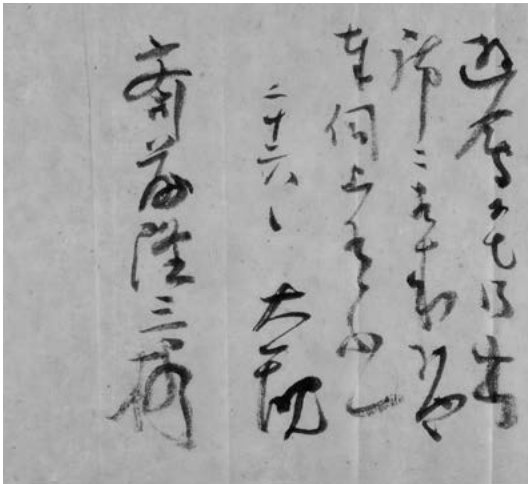
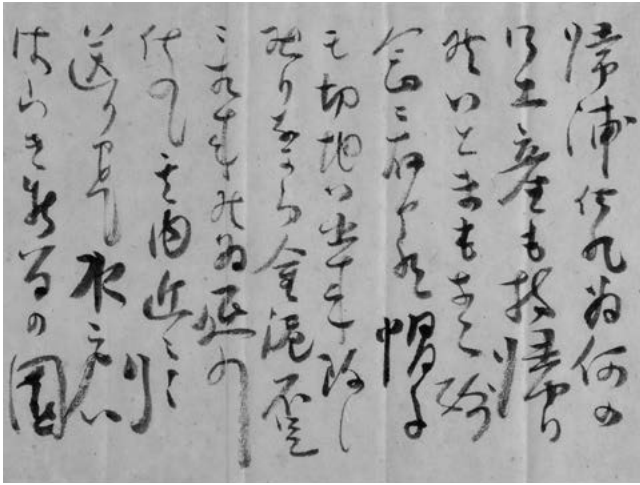
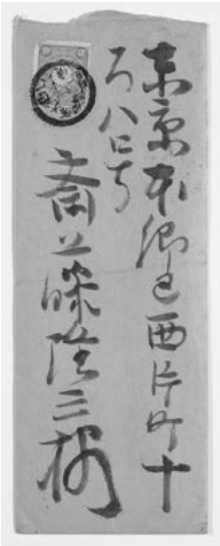
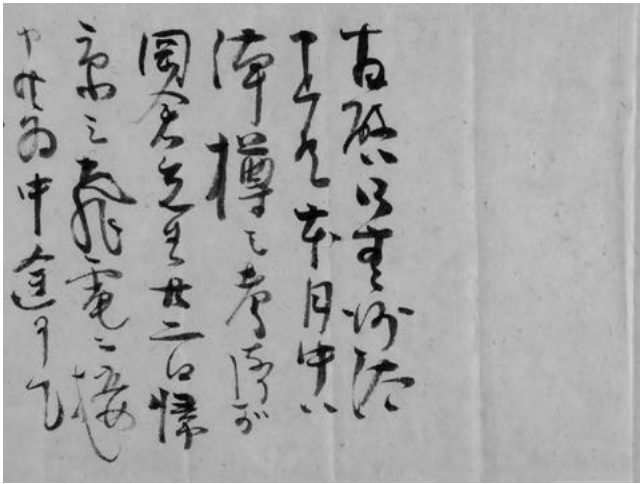
貴下

資料15

横山大観

「書簡・齋藤隆三宛」

明治41年6月22日



【封筒表】 東京本郷区西片町十

ろ八号

齋藤隆三様

【封筒裏】

横山大観

常陸大津町五浦

【本文】

拝啓 御無沙汰

申上候 本月中ハ

滞樽之考なりしが

岡倉先生廿二日帰

京之飛電ニ接し

申候為中途にて

帰浦仕候為何の

御土産も持帰り

候いとまもなく残

念ニ存申候 帽子

モ切地ハ出来致し

居りながら金泥不足

ニ相成候為延引

仕候 其内近々御

送り申上候 水戸い

はらき新聞の園

遊會には御出

席ニ相成候や

奉伺上候 不一

二十六日 大観

齋藤隆三様

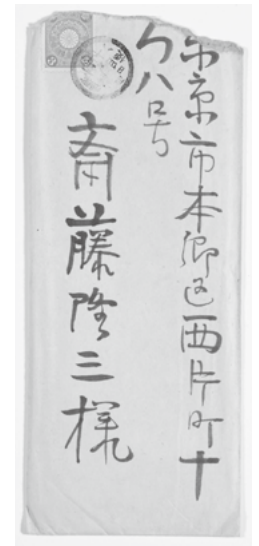
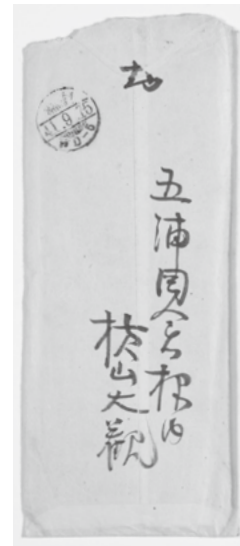
資料16
横山大観
「書簡・齋藤隆三宛」
明治41年7月26日

右啓 早速御見舞
ヲ辱ふし奉謝候
愚妻と共ニ幸ニ
無事御安神被下
度候 頃日米展覧
會出品画にて自宅
に執筆罷在候去
十一日午后あわた
しき下女之声ニ驚
かされ立出で見候處
其迄に
余程時間ヲ相聖たる
ものと相見え折柄の
強風にあはられて湯
殿一面ハ白煙ニ漲り
居候故不取敢屋根ニ
上り候處已に家根
全体ヨリ白煙の立
昇る次第故時機
後れたりと存じ直ニ
出品画と筆硯の半
ヲ持出し妻ハ中ニ
階ニ走り下女ハ岡倉
先生方ニ走り(下男不在)
小生二度目ニ家ニ入ら
んとせる時ハ全家已ニ
火焰ニ包まれ寸前
も入るヲ得ざる次第
妻ハ又白煙ニ包まれ
て一品も出ずの余祐
なくして打倒れ居候
内漸々四五の人々
かけ付先つ以而
身ヲ以テ僅力に免れ候様
の始末にて殊に當日ハ
いつも二三ハ近所

全体ヨリ白煙ニ漲り
居候故不取敢屋根ニ
上り候處已に家根
全体ヨリ白煙の立
昇る次第故時機
後れたりと存じ直ニ
出品画と筆硯の半
ヲ持出し妻ハ中ニ
階ニ走り下女ハ岡倉
先生方ニ走り(下男不在)
小生二度目ニ家ニ入ら
んとせる時ハ全家已ニ
火焰ニ包まれ寸前
も入るヲ得ざる次第
妻ハ又白煙ニ包まれ
て一品も出ずの余祐
なくして打倒れ居候
内漸々四五の人々
かけ付先つ以而
身ヲ以テ僅力に免れ候様
の始末にて殊に當日ハ
いつも二三ハ近所

海より山あり
し人も見え不申
御承知之如き僻
の地とて人々のかけ
つけし時ハ已ニ全
家火焰ニ包まれ
居申候 幸ニ人々の助
力にて妻之衣類之一
半も取出し申候
来月ハ上京之用向
も有之再築迄も
相應ニ時日ヲ要し候
事故茲暫く東京
ニ其より滞在仕ら
んかとも存居候
いつれ拜趨方々御
礼申上候へ共不取敢
右御しらせ申上候
又新たなる世
界に生れ出候様
にて若返り居候心地
いたし申候 御令
夫人にもよろしく
願上候 不備
十三日 横山大観
齋藤隆三様
貴下

資料17
横山大観
「書簡・齋藤隆三宛」
明治41年9月13日



【封筒表】 東京市本郷区西片町十
ろ八号
齋藤隆三様
【封筒裏】 五浦岡倉様内
横山大観

【本文】

拝啓 早速御見舞

の海なり山なりに見え

ヲ辱ふし奉謝候

し人も見え不申

愚妻と共ニ幸ニ

御承知之如き僻

無事御安神被下

の地とて人々のかけ

度候 頃日米展覧

つけし時ハ已ニ全

會出品画にて自宅

家火焰ニ包まれ

に執筆罷在候去

居申候 幸ニ人々の助

十一日午后あわた

力にて妻之衣類之一

しき下女之声ニ驚

半も取出し申候

かされ立出で見候處

来月ハ上京之用向

其迄に

も有之再築迄も

余程時間ヲ相聖たる

相應ニ時日ヲ要し候

ものと相見え折柄の

事故茲暫く東京

強風にあはられて湯

ニ其より滞在仕ら

殿一面ハ白煙ニ漲り

んかとも存居候

居候故不取敢屋根ニ

いつれ拜趨方々御

上り候處已に家根

礼申上候へ共不取敢

全体ヨリ白煙の立

右御しらせ申上候

昇る次第故時機

又新たなる世

後れたりと存じ直ニ

界に生れ出候様

出品画と筆硯の半

にて若返り居候心地

ヲ持出し妻ハ中ニ

いたし申候 御令

階ニ走り下女ハ岡倉

夫人にもよろしく

先生方ニ走り(下男不在)

願上候 不備

小生二度目ニ家ニ入ら

十三日 横山大観

んとせる時ハ全家已ニ

齋藤隆三様

火焰ニ包まれ寸前

貴下

も入るヲ得ざる次第

妻ハ又白煙ニ包まれ

て一品も出ずの余祐

なくして打倒れ居候

内漸々四五の人々

かけ付先つ以而

身ヲ以テ僅力に免れ候様

の始末にて殊に當日ハ

いつも二三ハ近所

右啓者、先日出で
り厚情に候る方
類より禮を以て
名左の件に付、神
細り直におね神
付の例の辰澤様
登起の後援会と
意より承り候と
建も上京六日前
名存やへ御出で候
が、今月十五日
頃迄、百に決意を
之の君より二日前
たあき、り、と
り、指市に候る
余、あき、故、障、と

常陸五浦
横山大観

東京市本郷区西片町十
ろ八号
齋藤隆三様

右啓者、先日出で
り厚情に候る方
類より禮を以て
名左の件に付、神
細り直におね神
付の例の辰澤様
登起の後援会と
意より承り候と
建も上京六日前
名存やへ御出で候
が、今月十五日
頃迄、百に決意を
之の君より二日前
たあき、り、と
り、指市に候る
余、あき、故、障、と

右啓者、先日出で
り厚情に候る方
類より禮を以て
名左の件に付、神
細り直におね神
付の例の辰澤様
登起の後援会と
意より承り候と
建も上京六日前
名存やへ御出で候
が、今月十五日
頃迄、百に決意を
之の君より二日前
たあき、り、と
り、指市に候る
余、あき、故、障、と

【封筒表】

東京市本郷区西片町十
ろ八号
齋藤隆三様

【封筒裏】

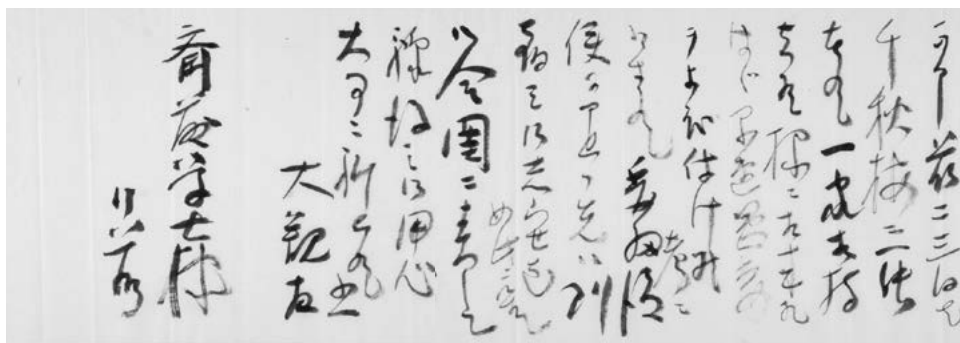
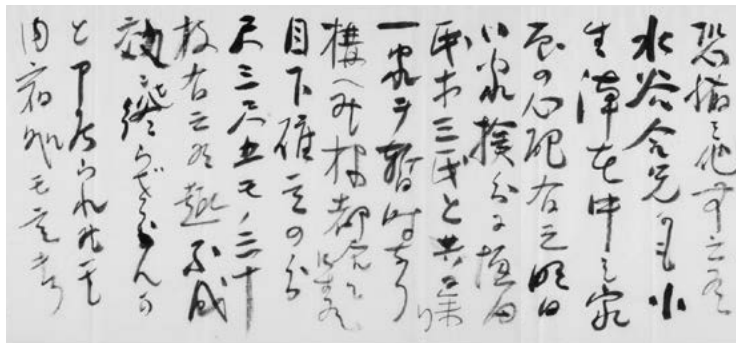
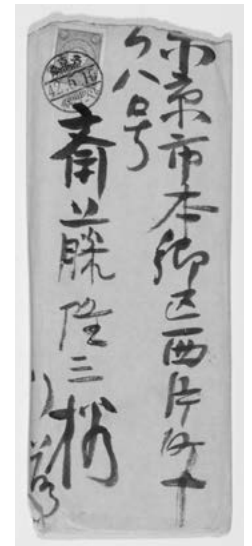
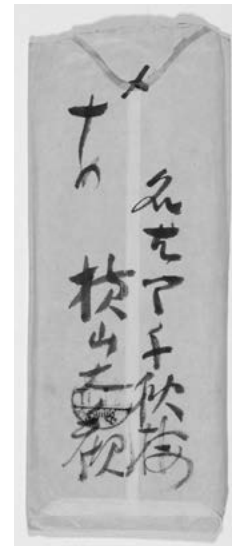
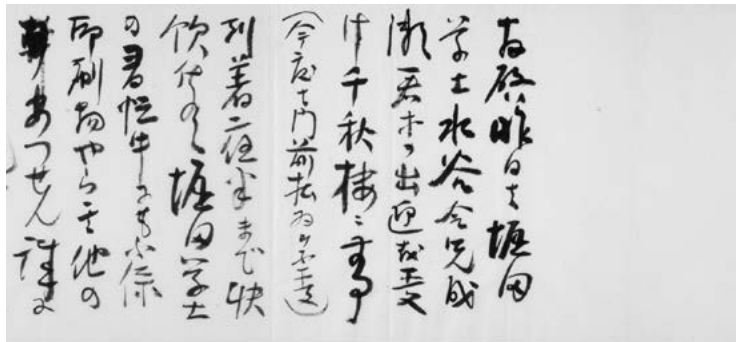
常陸五浦
横山大観

【本文】

拝復 先日は罷出で
御厚情に預り有
難く御禮申上候
名古や行の件に付、詳
細御通知被下、拝誦
仕候 例の辰澤様
発起の後援会相
定まり居り候は、早
速にも上京六日前二
名古やへ罷出でべきなれ
ど右会四月十五日
頃迄の間、二決定の筈
二有之多分十二日前二
は相きまり可申と存じ
候間御指示に從ひ
余義なき故障出来
致さる限り十二日二
東京出立名古や
へ参り候様仕り度く
候間何卒堀田
様二よろしく御願
申上候 いづれ来月
七日二は上京仕り候間
其上にて委細御高
教重ねて仰度く存居候
見本として尺八物四
枚許二日力三日迄二
御手元迄差出し申上候
間、是又御手数ながら
堀田様の方へ御回
送被下度他二昨秋
展覽會出品画之
写真版二葉其節
御送り申上候

ミシン御預り被下居由
有難く存申候 遂に
忘れ居候 金子八七日
二上京之節持参
仕るべく水谷様二
よろしく御傳声被下
度願上候
御令聞二よろしく
願上候 先日、帰浦以来
漸く一日丈海平なりしも
其后日々二荒れ居
住むに堪へ難き感
御坐候
大観

卅日
齋藤隆三様
御前



【封筒表】 東京市本郷区西片町十

ろ八号

齋藤隆三様

御前

【封筒裏】 名古屋千秋楼

横山大観

十日

【本文】

拝啓 昨日は堀田

学士水谷令兄成

瀬君等の出迎を受

け千秋楼ニ無事

(今度は門前払のヲ不受)

到着夜半まで快

飲仕候 堀田学士

の多忙中にも不係

印刷物やら其他の

あつせん誠に

恐縮之他無之候

水谷令兄にも小

生滞在中之家

屋の心配有之昨日

ハ家検分に堀田

氏等三氏と共に参り

一家ヲ暫時なり

構へ候様都合に御坐候

目下確定の分

尺三尺五モノ三十

枚有之候趣不成

効ニは終らざらんか

と申居られ候へ共

内宿処モ定まり

可申前二三日は

千秋楼ニ罷

在候 一家相持

ち候様ニ相成候

はゞ早速愚妻

ヲよび付け候考ニ

御坐候 委細後

便に申上候 先ハ到

宿之御しらせ迄

如此御坐候

御令聞によろしく

餘後之御用心

大事ニ祈上候

不一

大観拝

齋藤学士様

御前

資料19

横山大観

「大観書簡」

明治42年5月10日

有る前日と云
東仕置きながら差
支え起り候為失
禮と云ふもあら
と延引仕置候
昨今の暑氣
飲み会之念も起
りふや 飲んも
今更水一ころ
近やぬさるに

本郷区西片町十
の八号
齋藤隆三様

有る前日と云
東仕置きながら差
支え起り候為失
禮と云ふもあら
と延引仕置候
昨今の暑氣
飲み会之念も起
りふや 飲んも
今更水一ころ
近やぬさるに

有る前日と云
東仕置きながら差
支え起り候為失
禮と云ふもあら
と延引仕置候
昨今の暑氣
飲み会之念も起
りふや 飲んも
今更水一ころ
近やぬさるに

有る前日と云
東仕置きながら差
支え起り候為失
禮と云ふもあら
と延引仕置候
昨今の暑氣
飲み会之念も起
りふや 飲んも
今更水一ころ
近やぬさるに

【封筒表】

本郷区西片町十
の八号
齋藤隆三様

【封筒裏】

本郷千駄木町
横山大観

【本文】

拝啓 前日は御約
束仕置きながら差
支え起り候為失
禮とは存じながら暫
く延引仕置候處
昨今の暑氣ハ
飲み會之念も起
り不申飲んでも
余りうれしからず
近處にてはいづれ

【本文】

有象無象之
諸人參集ひどき
かとおそろしく存じ
申候間勝手がまし
き次第なれどもず
つと相延ばし此
次九月初め上京
之途次二仕り度
不惡御諒承被下度
願上候 用事も有之
候間今暫く滞
京仕度候へ共堪
へがたき暑さに進ま
ぬながら五浦戀
しく今夜急行
にて一先つ帰宅
仕展覽會の出品
畫なり作り上げ候考
二御坐候 御ひまも
御坐候はゞ何とか
御都合被遊御令
聞御同道にて二三日なり
とも御來遊被下度
待被居申候 先ハ
御託やら御断迄
如此二御坐候 不一

十七日 大観

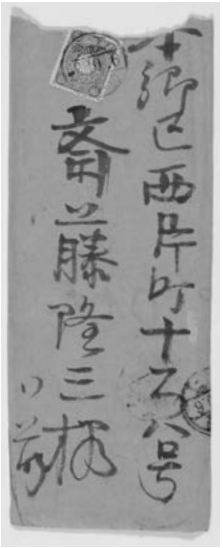
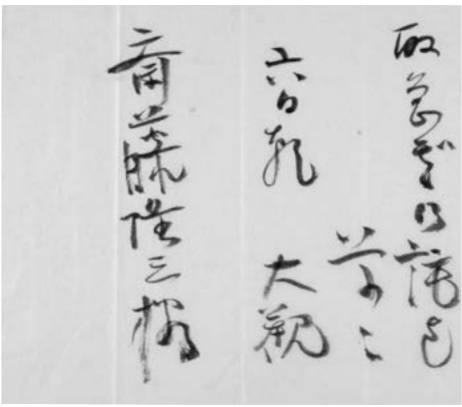
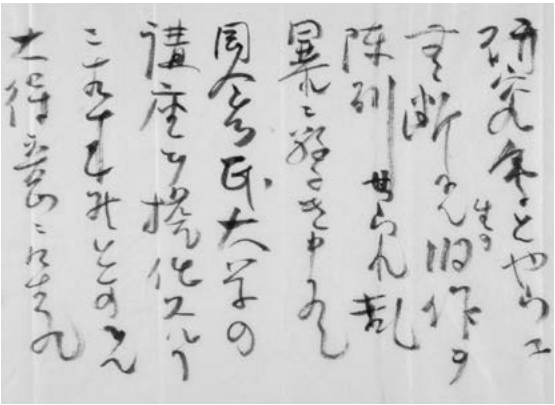
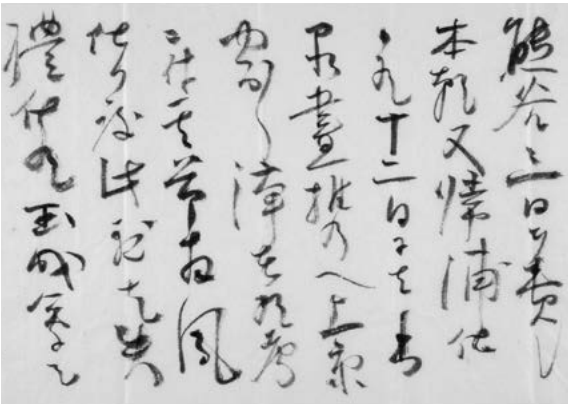
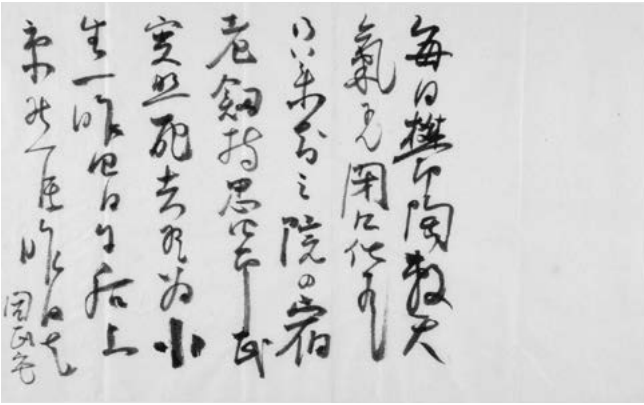
齋藤隆三様
御前

資料20

横山大観

「書簡・齋藤隆三宛」

明治42年7月17日

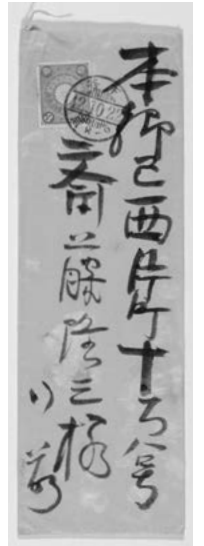
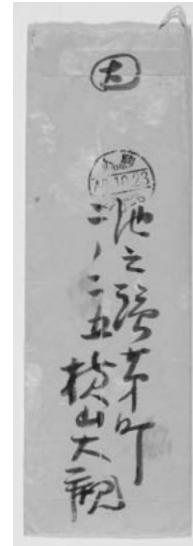
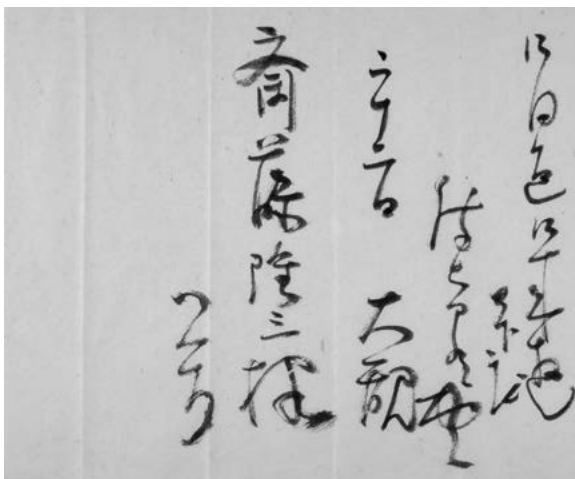
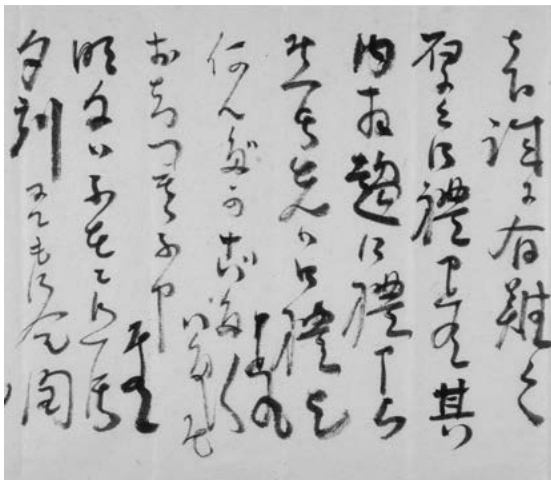
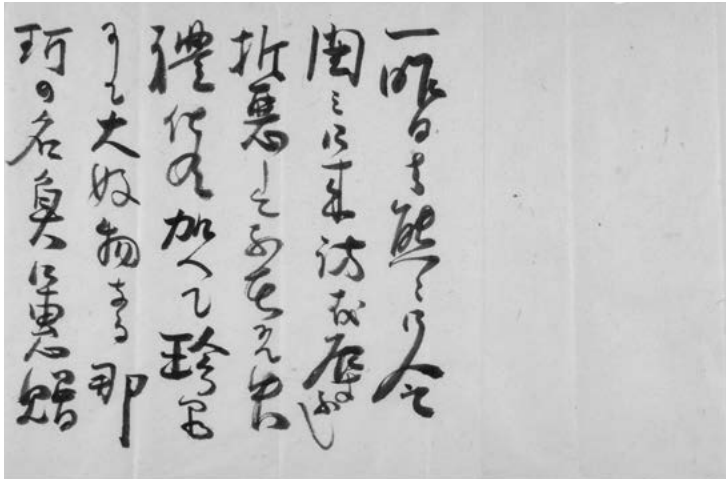


【封筒表】 本郷区西片町十ろ八号
齋藤隆三様
御前
【封筒裏】 千駄木町
横山大観

【本文】 毎日鬱陶敷天
氣にて閉口仕候
御承知之院の宿
老劍持忠四郎氏
突然死去候為小
生一昨日四日午后上
京候へ共昨日は
同氏宅
熊谷二一日ヲ費し
本朝又帰浦仕
り候十二日ニは出
品畫携へ上京
ゆるく滞在候考
二付其節拜鳳
仕り度此度は失
禮仕候 玉成會之
研究會（*）とやらエ
無断にて生の旧作ヲ
陳列せられ乱
暴二驚き申し候
岡倉氏大学の
講座ヲ擔任スル事
二相成候とかにて（**）
大得意ニ御坐候
取急ぎ御託迄
草々
六日朝 大観
齋藤隆三様

資料21
横山大観
「書簡・齋藤隆三宛」
明治42年10月6日

（*） 国画玉成会研究会展覧会
（**） 明治43年に東京帝国大学で講義した「泰東巧芸史」か。



【封筒表】 本郷区西片町十ろノ八号

齋藤隆三殿

御前

【封筒裏】 池ノ端茅町

二ノ二五 横山大観

【本文】

一昨日は態々御令
閨之御来訪を辱ふし
折悪して不在にて失
禮仕候 加へて珍品
にて大好物なる那
珂の名魚御惠贈

被下誠に有難く

厚く御禮申上候 其

内拝趨御禮申上

候へ共先ハ御禮迄申上候

何んだかごたくいたし候

おちつき不申居候

昨日ハ不在ニ候へ共

夕刻にても御令閨

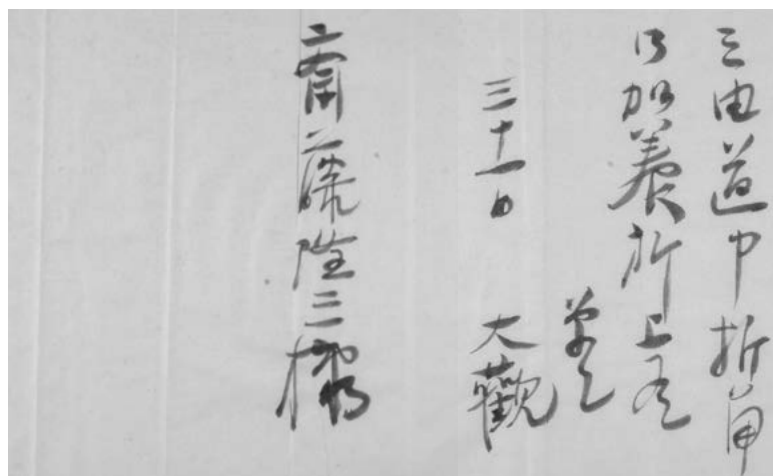
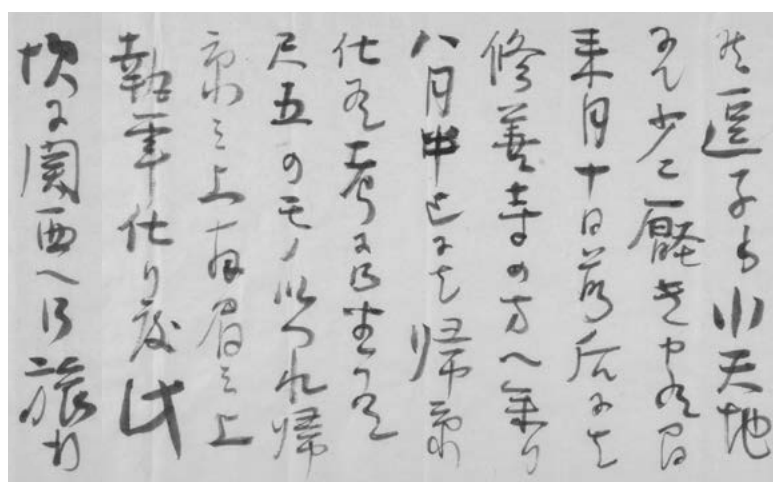
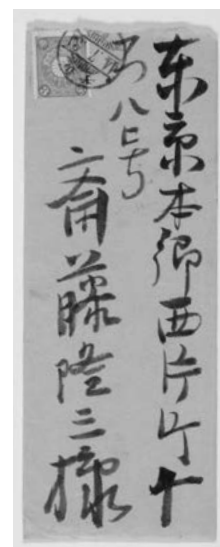
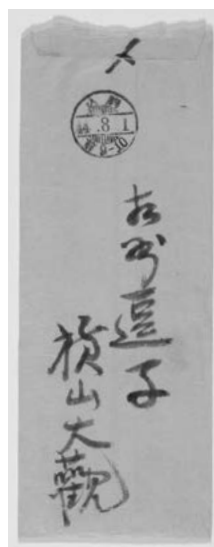
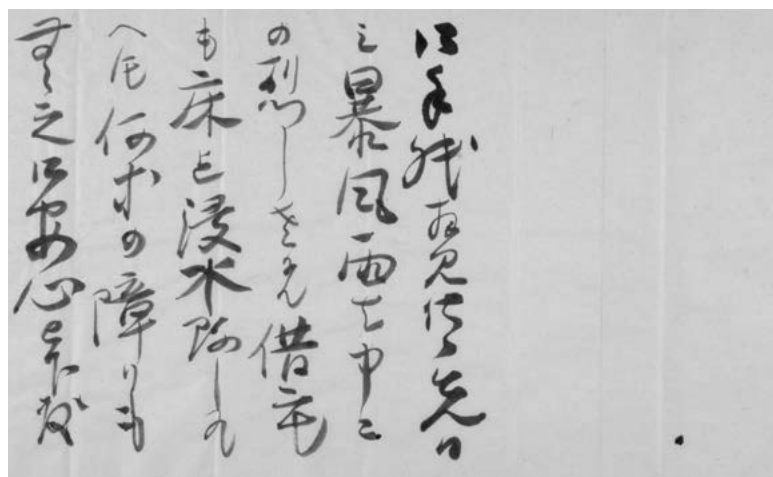
御同道御来遊被下度

待上申候 頓首

二十二日 大観

齋藤隆三様

御前



【封筒表】 東京本郷西片町十

ろ八号

齋藤隆三様

【封筒裏】 相模逗子

横山大観

【本文】 御手紙拝見仕候 先日

之暴風雨（*）は中々

の烈しさにて借宅

も床迄浸水致し候

へ共何等の障りも

無之御安心被下度

候 逗子も小天地

にて少々壓さ申候間

来月十日前后には

修善寺の方へ参り

八月半迄には帰京

仕候考に御坐候

尺五のモノいつれ帰

京之上拜眉之上

執筆仕り度此

頃に関西へ御旅行

之由道中折角

御加養祈上候

草々

三十一日 大観

齋藤隆三様

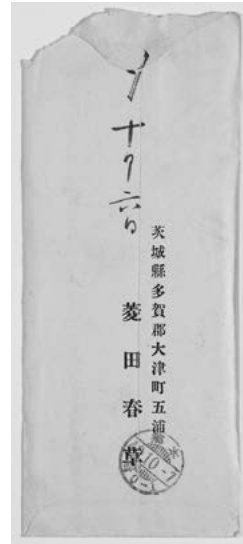
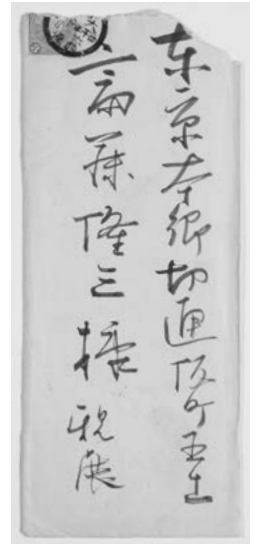
資料23

横山大観

「書簡・齋藤隆三宛」

明治44年7月31日

（*）7月25日から26日にかけて東海から関東地域に被害をもたらした暴風雨のこと。



【封筒表】

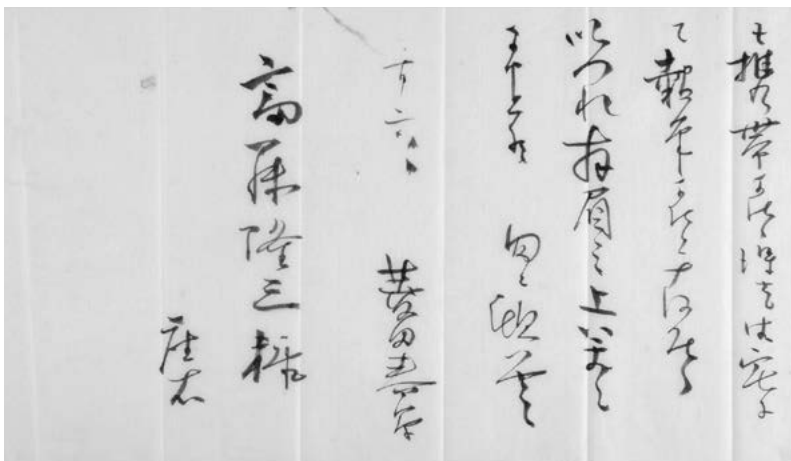
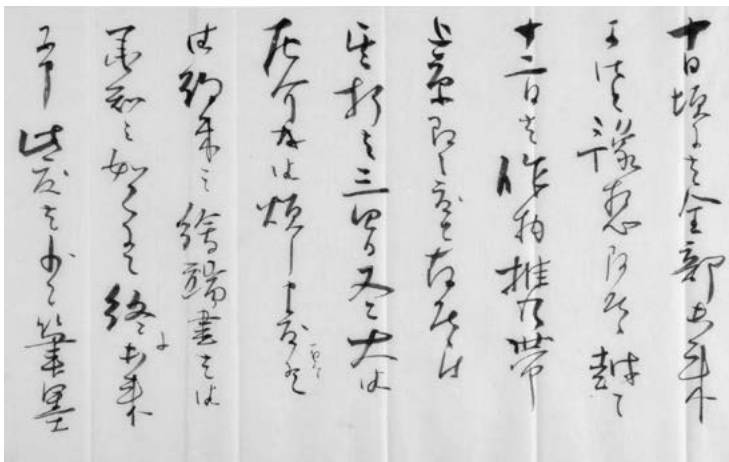
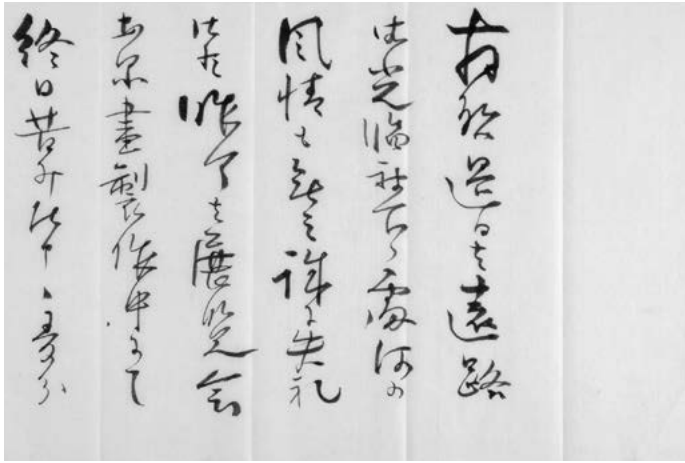
東京本郷切通阪町五十一
齋藤隆三様 親展

【本文】

拝啓 過日は遠路
御光臨被下候處何の
風情も無之誠ニ失礼
仕候 昨今は展覧会
出品畫製作中にて
終日苦み居申候 多分

【封筒裏】

茨城県多賀郡大津町五浦
菱田春草
十月六日



十日頃には全部出来

可仕と豫想致居候 越て

十二日は作物携帶

上京致し度と存居候

其折は三四日又々大御

厄介を御煩し申度存居候

御約束之繪端書は御

承知之如くにて終に出来

不申此度は少々筆墨

も携帶可仕候得は御宅に

て執筆可仕と存居候

いつれ拝眉之上萬々

可申上候 勿々頓首

十月六日 菱田春草

齋藤隆三様

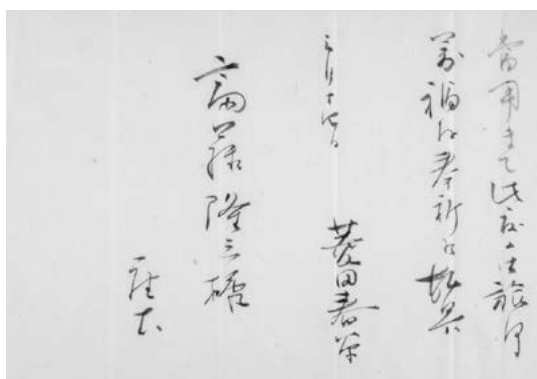
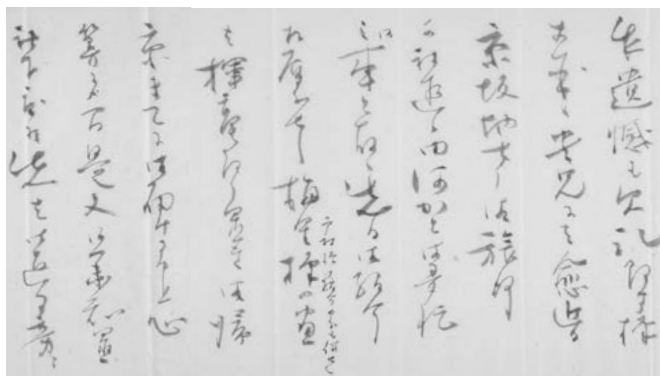
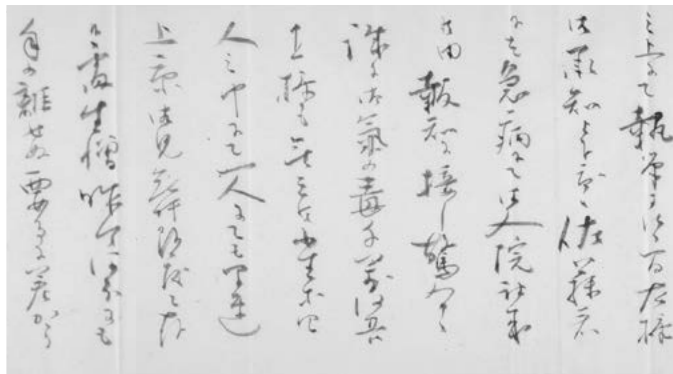
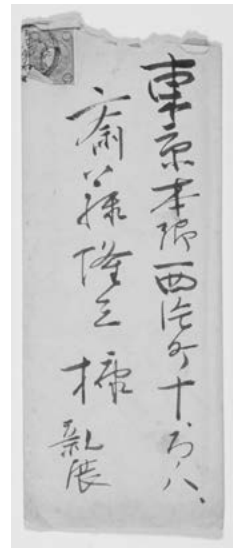
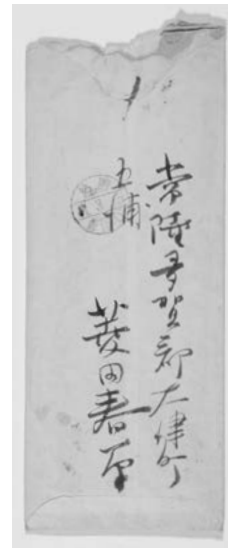
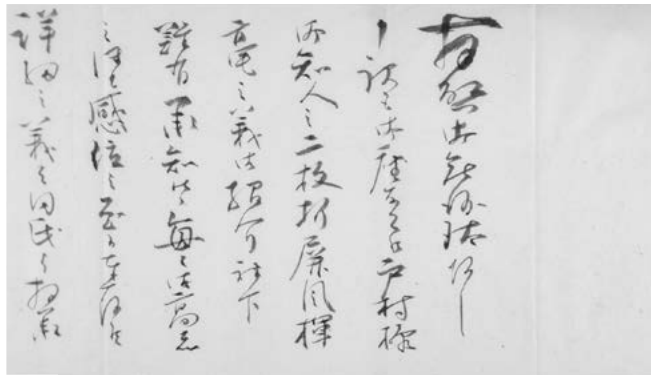
座右

資料24

菱田春草

「書簡・齋藤隆三宛」

明治40年10月6日



【封筒表】

東京本郷西片町十ろ八

齋藤隆三様 親展

【本文】

【封筒裏】

常陸多賀郡大津町
五浦 菱田春草

拝啓 御無沙汰致し

申訳も御座なく候戸村様

御知人之二枚折屏風揮

毫之義御紹介被下

難有承知仕候 毎々御高志

之ほど感泣之至に奉存候

詳細之義は同氏より拝承

之上にて執筆に仕候間左様

御承知被下度候 佐藤君(*)

には急病にて御入院被成

候由報知に接し驚入申候

誠に御氣の毒千萬何共

申上様も無之候 小生等四

人之中にて一人にても早速

上京御見舞致度と存

候處生憎昨今何分にも

手の離せぬ要事に差かゝり

乍遺憾も欠礼致す様

相成候 貴兄には愈近日

京坂地方へ御旅行

可被遊候由何かと御多忙

之御事と存候 先日御紹介

戸村様御紹介の分も併せて

を辱ふせし梅里様の畫

は揮毫致し置き御帰

京までに御届け申上心

算に候間又御承知置

被下度候 先は御返事旁々

當用まで此度の御旅行

萬福を奉折候 敬具

三月十四日 菱田春草

齋藤隆三様

座右

資料25

菱田春草

「書簡・齋藤隆三宛」

明治41年3月14日

(*) 佐藤秋蘋か。

此公暑熱堪候處愈々
御清光奉賀候 扱て小生
其後眼之方も追々快く
相成候 一二日前河本さん（*）
も旅行より帰られ診察
受候處余程よろしく
相成候由申居られ候 過日
林運太郎氏（**）之診察を
受仕候處腎臓病にて慢

府下豊多摩郡
代々木字山谷百十七、
菱田春草

市内本郷区西片町十、
ろノ八号
齋藤隆三様 親展

【封筒表】

市内本郷区西片町十
ろノ八号
齋藤隆三様 親展

【封筒裏】

府下豊多摩郡
代々木字山谷百十七、
菱田春草
八月十五日

【本文】

炎暑難堪候處愈々
御清光奉賀候 扱て小生
其後眼之方も追々快く
相成候 一二日前河本さん（*）
も旅行より帰られ診察
受候處余程よろしく
相成候由申居られ候 過日
林運太郎氏（**）之診察を
受仕候處腎臓病にて慢

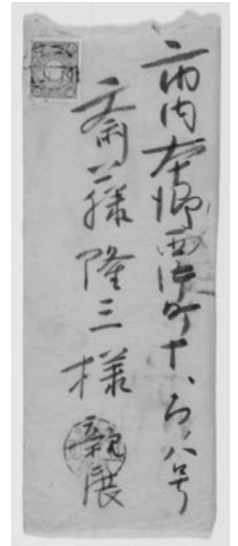
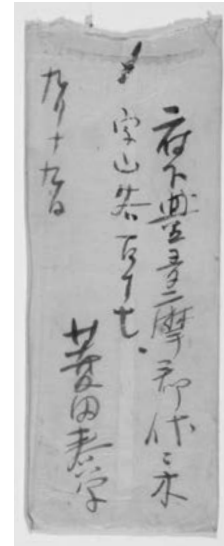
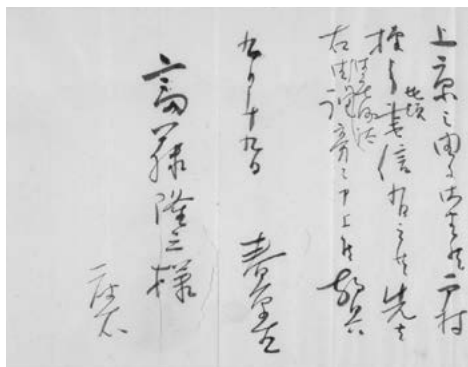
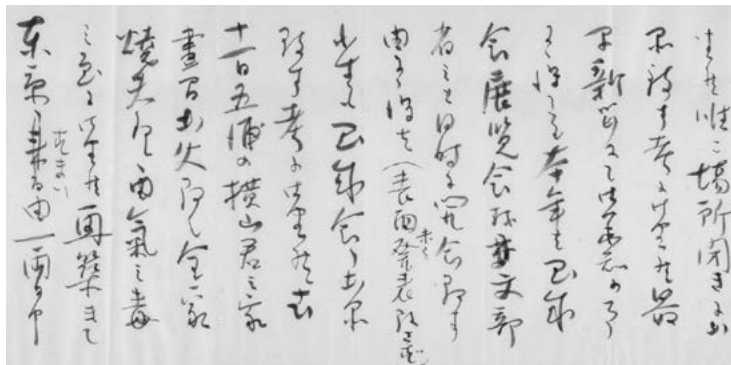
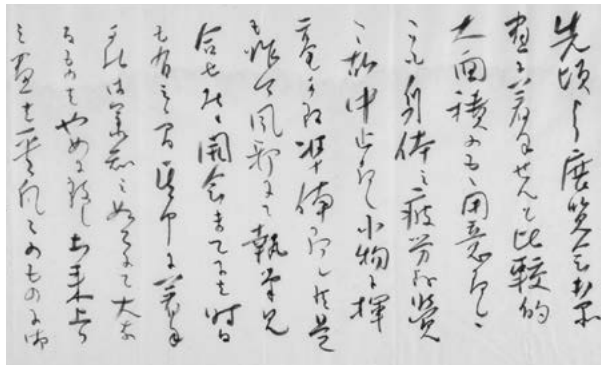
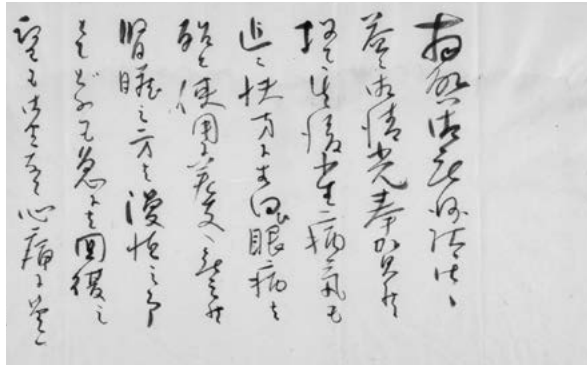
性なり居り自分之考に
ては四五年前より悪しかり
しとの事なり同氏之診察
室には御談も有之候如くに
て機械も具り居り小生之尿も
顕微鏡にて試験致し
体之診察も充分注意を
拂はれ養生法を精細に
語られ候 大体運動を
避け滋養物を食し種々
忌避ひ之食物も教へられ
候 薬は散薬にて殊によき
薬なりとか全快までには長
く急には回復せざる由申
居られ候 小生は畫をかく
由申候處病氣之方には
大へん都合よろしと申
居られ候 夫や是やにて近き
中に報筆いたさんかと存
居候
貴兄には其後御かわり
も無之事と存候 幸に
御自愛可被成候
敬具

此公暑熱堪候處愈々
御清光奉賀候 扱て小生
其後眼之方も追々快く
相成候 一二日前河本さん（*）
も旅行より帰られ診察
受候處余程よろしく
相成候由申居られ候 過日
林運太郎氏（**）之診察を
受仕候處腎臓病にて慢

八月十五日 春草生
齋藤隆三様 座右

資料26
菱田春草
「書簡・齋藤隆三宛」
明治41年8月15日

（*）河本重次郎か。
（**）晩年の明治44年にも同医師に雇っている。
（勅使河原純『菱田春草とその時代』六藝書房、1982年）



【封筒表】

市内本郷西片町十、ろノ八号
齋藤隆三様 親展

【封筒裏】

府下豊多摩郡代々木
字山谷百十七、
菱田春草

九月十九日

【本文】

拝啓 御無沙汰仕候
益々御清光奉賀候
扱て其後小生病氣も
追々快方に相向ひ眼病は
殆ど使用に差支へ無之候
腎臓の方は慢性之事
とてどふも急には回復之
望も御坐なく心痛に御坐候
先頃より展覧会出品
畫に着手せんと比較的
大面積のモノ用意致し候
へとも身体之疲労を覺
へ候故中止致し小物に揮
毫可致準備致し候 是
も昨今風邪にて執筆見
合せ居候 開会までには時日
も有之候間其中に着手
可仕御承知之如くにて大な
るものはやめに致し出来上り
之畫は平々凡々之ものに御

坐候 唯々場所閉きに出
品致す考に御坐候 最
早新聞にて御承知の事
に候得とも本年は玉成
会展覧会を文部
省之と同時に開会致す
由に候得は(表面未だ発表致さず)
小生も玉成会へ出品
致す考に御坐候 去
十一日五浦の横山君之家
畫間出火致し全家
焼失致し候由氣之毒
之至に御坐候 再築まで
東京へすまい由一兩日中
上京之由に御坐候 戸村
様より此頃書信有之候 先は
右御無沙汰御詫旁々申上候 敬具
九月十九日 春草生
齋藤隆三様
座右

別表 横山大観・菱田春草「齋藤隆三宛書簡」一覧

資料 番号	作者	作品名	制作年 (和暦)	制作年 (西暦)	月日	法量 (cm)	所蔵	備考
1	横山大観、 菱田春草、 木村武山	書簡・齋藤隆三、 佐藤勇作宛	明治40	1907	1月9日	封筒：21.0×8.3、巻紙：18.0×99.5		
2	日本美術院	書簡・齋藤隆三宛	明治40	1907	1月15日	封筒：22.2×9.0、巻紙：18.0×59.0	当館	
3	横山大観	書簡・齋藤隆三宛	明治40	1907	1月27日	封筒：20.0×8.5、巻紙：18.0×57.5	当館	
4	横山大観	書簡・齋藤隆三宛	明治40	1907	2月9日	封筒：21.0×8.5、巻紙：17.5×82.5	当館	
5	横山大観	書簡・齋藤隆三宛	明治40	1907	2月17日	封筒：21.0×8.5、巻紙：18.0×125.5	当館	
6	横山大観	書簡・齋藤隆三宛	明治40	1907	2月24日	封筒：20.5×8.4、巻紙：17.9×69.2	当館	
7	横山大観	書簡・齋藤隆三宛	明治40	1907	3月22日	封筒：20.5×9.0、巻紙：17.8×84.3	当館	
8	横山大観	書簡・齋藤隆三宛	明治40	1907	4月1日	封筒：20.0×7.5、巻紙：18.2×110.0		
9	横山大観	書簡・齋藤隆三宛	明治40	1907	6月11日	封筒：21.3×7.8、巻紙：17.8×92.0	当館	
10	横山大観	書簡・齋藤隆三宛	明治40	1907	8月7日	封筒：21.0×8.0、巻紙：18.0×108.0	当館	
11	横山大観	書簡・齋藤隆三宛	明治41	1908	2月4日	封筒：19.2×7.5、巻紙：18.0×77.5		
12	横山大観	書簡・齋藤隆三宛	明治41	1908	4月17日	封筒：19.5×7.2、巻紙：16.2×126.0	当館	
13	横山大観	書簡・齋藤隆三宛	明治41	1908	5月2日	封筒：19.5×7.2、巻紙：18.0×151.0	当館	
14	横山大観	書簡・齋藤隆三宛	明治41	1908	5月24日	封筒：19.5×7.3、巻紙：19.0×101.0	当館	
15	横山大観	書簡・齋藤隆三宛	明治41	1908	6月22日	封筒：18.5×6.8、巻紙：17.7×149.0	当館	
16	横山大観	書簡・齋藤隆三宛	明治41	1908	7月26日	封筒：19.3×7.2、巻紙：19.0×73.5	当館	
17	横山大観	書簡・齋藤隆三宛	明治41	1908	9月13日	封筒：20.3×8.3、巻紙：17.8×163.0	当館	
18	横山大観	書簡・齋藤隆三宛	明治42	1909	3月30日	封筒：20.0×7.2、巻紙：18.0×133.0	当館	
19	横山大観	書簡・齋藤隆三宛	明治42	1909	5月10日	封筒：20.5×8.2、巻紙：18.0×127.0		大観会申込書付属
20	横山大観	書簡・齋藤隆三宛	明治42	1909	7月17日	封筒：20.0×7.8、巻紙：18.2×126.0		
	横山大観	書簡・齋藤隆三宛	明治42	1909	9月9日	封筒：20.0×7.8、巻紙：17.5×101.0		『横山大観』第4巻昭和2(大日本絵画巧芸美術、1980)掲載
21	横山大観	書簡・齋藤隆三宛	明治42	1909	10月6日	封筒：19.5×7.8、巻紙：18.0×95.0		
22	横山大観	書簡・齋藤隆三宛	明治42	1909	10月22日	封筒：19.0×6.3、巻紙：18.0×68.0		
23	横山大観	書簡・齋藤隆三宛	明治44	1911	7月31日	封筒：19.0×7.0、巻紙：18.0×87.5		
	菱田春草	書簡・齋藤隆三宛	不詳		12月9日	巻紙：17.8×63.5		『総合年譜』『菱田春草 続』掲載 (『菱田春草 続』に明治29年とあるが封筒を欠き根拠不明)
	菱田春草	書簡・齋藤隆三宛	明治40	1907	7月15日	封筒：20.2×8.4、巻紙：17.5×132.5	当館	『総合年譜』『菱田春草 続』掲載
24	菱田春草	書簡・齋藤隆三宛	明治40	1907	10月6日	封筒：20.1×8.2、巻紙：18.0×84.5	当館	『総合年譜』に明治41年1月6日書簡と紹介されるが誤り。
	菱田春草	書簡・齋藤隆三宛	明治40	1907	12月22日	封筒：20.8×8.5、巻紙：18.2×101.5	当館	『総合年譜』『菱田春草 続』掲載
	菱田春草	書簡・齋藤隆三宛	明治41	1908	1月19日	封筒：21.2×8.3、巻紙：18.0×76.3	当館	『総合年譜』『菱田春草 続』掲載
	菱田春草	書簡・齋藤隆三宛	明治41	1908	1月25日	封筒：20.0×8.3、巻紙：17.8×86.3	当館	『総合年譜』『菱田春草 続』掲載
	菱田春草	書簡・齋藤隆三宛	明治41	1908	1月30日	封筒：20.5×8.3、巻紙：17.5×237.0	当館	『総合年譜』『菱田春草 続』掲載
	菱田春草	書簡・齋藤隆三宛	明治41	1908	2月16日	封筒：20.5×8.4、巻紙：17.8×147.1	当館	『総合年譜』『菱田春草 続』掲載
	菱田春草	書簡・齋藤隆三宛	明治41	1908	2月29日	封筒：20.7×8.5、巻紙：17.5×96.0	当館	『総合年譜』『菱田春草 続』掲載
25	菱田春草	書簡・齋藤隆三宛	明治41	1908	3月14日	封筒：21.0×8.2、巻紙：17.5×111.0	当館	
	菱田春草	書簡・齋藤隆三宛	明治41	1908	4月13日	封筒：20.8×8.3、巻紙：18.2×127.0	当館	『総合年譜』『菱田春草 続』掲載
	菱田春草	書簡・齋藤隆三宛	明治41	1908	6月10日	封筒：22.0×8.5、巻紙：18.0×65.0		『総合年譜』『菱田春草 続』掲載
	菱田春草	書簡・齋藤隆三宛	明治41	1908	6月24日	封筒：19.7×7.8、巻紙：18.4×97.0		『総合年譜』『菱田春草 続』掲載
26	菱田春草	書簡・齋藤隆三宛	明治41	1908	8月15日	封筒：20.5×8.5、巻紙：19.5×118.8		
27	菱田春草	書簡・齋藤隆三宛	明治41	1908	9月19日	封筒：20.0×7.8、巻紙：18.0×104.0		
	菱田春草	書簡・齋藤隆三宛	明治42	1909	11月1日	封筒：20.5×7.8、巻紙：18.0×60.5		『総合年譜』『菱田春草 続』掲載
	菱田春草	書簡・齋藤隆三宛	明治43	1910	3月5日	封筒：20.5×8.0、巻紙：17.4×71.0		『総合年譜』『菱田春草 続』掲載
	菱田春草	葉書・齋藤隆三宛	明治43	1910	12月9日	14.0×9.0		『総合年譜』掲載

凡例

- ・「所蔵」が「当館」の資料は茨城県天心記念五浦美術館蔵を示す。
- ・月日は書簡あるいは封筒の記載による。
- ・先行研究で既に紹介された書簡資料については「備考」でその旨を記した。なお文献名は次のとおり省略して記載している。
『総合年譜』：下伊那教育会編『菱田春草総合年譜』（下伊那教育会、1974年）
『菱田春草 続』：菱田春夫編著『菱田春草 続』（大日本絵画巧芸美術、1978年）